

南山浦古墳群調査報告書

1985年 3月

高松市教育委員会

序

文化財は、それぞれ固有の価値を保有し、個性豊かな地域の歴史的な環境づくりに貢献しています。

それだけに、わたしたちは、地域の文化財に学び豊かなふるさとの創造に努めなければならないと思います。

このたび、石清尾山古墳群の一支群といえる南山浦古墳群が所在する地域で、一土地所有者が果樹栽培を中心とする専業農家に転向するため、土壌の若返りをはかろうという計画が持ち上がりました。

しかし、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地でありますので、香川県教育委員会と協議を行い、残念ではありますが調査記録保存を目的とした発掘調査を実施することにいたしました。

調査は、国庫補助事業として昭和59年7月から実施し、調査結果を本報告書にまとめました。

調査にあたっては、香川県教育委員会・香川大学ならびに土地所有者、多数の関係者のご指導ご協力をいただきましたことに対し、厚くお礼を申し上げます。

最後に、この調査報告書についてのご意見ご批判を賜れば幸甚です。

昭和 60 年 3 月

高松市教育委員会

教育長 三 木 義 夫

例 言

- 1 本書は、高松市教育委員会が、国庫補助事業として実施した発掘調査の報告書である。
- 2 「南山浦古墳群」は、高松市西春日町南山浦に所在する。
- 3 今回調査対象となったのは、南山浦9号墳から13号墳までの五基である。
- 4 上記古墳の所在地は、高松市西春日町1385番地1.1627番地277である。
- 5 調査にあたっては、土地所有者 高木ユキキ、哲、敏一、寛氏のご理解とご協力を得た。
- 6 調査関係者は下記のとおりである。

教 育 長 三木 義夫	文化振興課長 三島 勝幸
教 育 部 長 山下 泰弘	文化振興課長補佐 入江 武夫
教育部次長 藤村 輝雄	文化振興係長 角谷 昇
	” 主事 立岩伊佐子
	” 主事 藤井 雄三
	” 主事 谷本 禎泰
	” 主事 合田 勇一
	” 主事 山田 正雄
	” 囑託 田村 雅彦

- 7 調査全期間において、市内在住の末光甲正氏の参加を得た。
- 8 調査事業の実施にあたって、香川県教育委員会、文化行政課の援助を賜った。特に、同課主幹松木豊胤氏の適切な指導をいただいた。
- 9 香川大学助教授 丹羽佑一氏、瀬戸内海歴史民俗資料館専門職員 松本敏三氏、香川県教育委員会文化財専門員 渡部明夫氏をはじめ、文化財担当諸氏のご、助言・協力を得た。
- 10 現地調査は、入江総括のもと、藤井、田村、末光があたり、山田が補助をした。
- 11 地形測量は、四国調査設計㈱に業務委託し、実施した。
- 12 整理作業は、入江総括のもと、藤井、田村、末光があたり、市内在住の浜田重人、山本英之両氏の協力を得た。
- 13 本報告書の執筆は、第一章を入江が行った他は、藤井が担当した。ただし、遺物観察表は、田村、浜田、山本による。
- 14 本報告書の編集は、藤井が、末光、浜田、山本の協力を得て、行った。
- 15 写真は、一部、藤井、田村による他は、末光による。
- 16 本文中、南山浦古墳群の各古墳を述べる時、南山浦を省略した。○号墳との記載は特別な場合を除き、南山浦古墳群をさす。
- 17 出土遺物については、101～146を9号墳、201～221を10号墳、301～430を11号墳、501～503を12号墳、601～619を13号墳の通し番号を付与し、使用した。
- 18 遺物観察表については、土器、鉄器、礫類、ガラス玉の順に記載し、土器は、古墳時代、弥生時代、古墳時代以降の三分割を採用した。各々の分類においては、番号の若い順に並べている。

目 次

本 文

第1章 調査の経過	1
第2章 環境	2
1 地理的環境	
2 歴史的環境	
第3章 南山古墳群	9
Ⅲ-1 南山浦9号墳	12
Ⅲ-2 南山浦10号墳	20
Ⅲ-3 南山浦11号墳	22
Ⅲ-4 南山浦12号墳	42
Ⅲ-5 南山浦13号墳	44
第4章 まとめ	53

遺物観察表

9号墳 須恵器・土師器観察表	59
10号墳 須恵器・土師器観察表	59
11号墳 須恵器・土師器観察表	60
13号墳 須恵器・土師器観察表	65
10号墳 弥生土器観察表	66
11号墳 弥生土器観察表	67
13号墳 弥生土器観察表	68
9号墳 古墳時代以降土器観察表	68
11号墳 古墳時代以降土器観察表	69
12号墳 古墳時代以降土器観察表	72
13号墳 古墳時代以降土器観察表	73
10号墳 鉄器観察表	73
11号墳 鉄器観察表	74
12号墳 鉄器観察表	76
13号墳 鉄器観察表	76
金・銀環観察表	76
ガラス玉観察表	77

插 图

第1图	遗迹分布图 I	6	第21图	南山浦11号墳遺物実測图 I	36
第2图	" E	7	第22图	" E	37
	遗迹分布园地名表	8	第23图	" III	38
第3图	調査区域実測图	10	第24图	" IV	39
第4图	調査地点配置图	11	第25图	" V	40
第5图	南山浦9号墳地形測量图	15	第26图	" VI	41
第6图	" 土層图	15	第27图	南山浦12号墳地形測量图	43
第7图	" 石室上面图	16	第28图	" 土層图	43
第8图	" 遺物分布图	16	第29图	" 石室実測图	43
第9图	" 石室実測图	17~18	第30图	南山浦13号墳地形測量图	47
第10图	" 出土遺物実測图	19	第31图	" 土層图	47
第11图	南山浦10号墳地形測量图	21	第32图	" 石室上面图	48
第12图	" 土層图	21	第33图	" 遺物分布图	48
第13图	" 石室実測图	23~24	第34图	" 石室実測图	49~50
第14图	" 遺物実測图	25	第35图	" 遺物実測图	51
第15图	南山浦11号墳地形測量图	31	第36图	各調査地点土層图	57~58
第16图	" 土層图	32			
第17图	" 石室上面图	32			
第18图	" 石室実測图	33~34			
第19图	" 排水溝実測图	35			
第20图	" 遺物分布图	35			

第15回	南山浦9号墳出土遺物	(101~146)	95
16	南山浦10号墳出土遺物	(201~209)	96
17	南山浦10号墳出土遺物	(210~221)	97
18	南山浦11号墳出土遺物	(301~314)	98
19	" 11号 "	(315~320, 317は除く)	99
20	" 11号 "	(321~327)	100
21	" 11号 "	(328~333, 332は除く)	101
22	" 11号 "	(317・332, 334~343)	102
23	" 11号 "	(351~376)	103
24	" 11号 "	(377~385)	104
25	" 11号 "	(386~390)	105
26	南山浦13号 "	(601~613, 609・610は除く)	106
27	南山浦12・13号 "	(501・609・610・614・620~633)	107
28	南山浦11~13号 "	(344~348, 391~414・416・502・503・615~619)	108
29	南山浦11号墳出土遺物	(415, 417~431)	109
	参考文献		110

第I章 調査の経過

南山蒲古墳群は、これまでの分布調査では、6基の竪土円墳が確認されていた。その6基については県営西春日園地建設に際して、香川県教育委員会が昭和47年に、3、6号墳を除く4基について発掘調査を実施している。

今回の調査事業に先立って実施した分布調査では、古墳の可能性があると推定される地点11か所を選定したが、調査によって5基が確認された。なお、昭和47年度、59年度調査地域以外では、7号墳は大半が破壊されながらも残存し、8号墳は既に消失している。

調査地域は、高松市西春日町に所在する県営西春日園地の北側に隣接する果樹園で、長い歳月の経過に伴う表土の流出によって畑地の乾燥がひどく、収穫量が目立つところである。このたび、土地所有者が専業農家に転向して本格的に果樹栽培をするため畑地を深耕して土壌の活性化をはかることを把握した。ところが当該地は、埋蔵文化財包蔵地であるため高松市教育委員会では、土地所有者に調査についての協力要請を行い、国庫補助事業として香川県教育委員会ならびに香川大学の指導助言を得て、調査を実施した。

調査は、先ず、地形測量を行った後、昭和59年7月16日から発掘調査を実施し、同年12月28日で現地調査を終了した。調査対象は、9号墳から13号墳までの5基である。現地調査終末段階の12月16日に現地説明会を開催したところ、郷土の歴史に関心をもつ百数十名にも及ぶ熱心な見学者が参集した。

なお、この調査にあたっては、香川県教育委員会・香川大学助教授、丹羽佑一氏のご指導ご援助、土地所有者ならびに多数の関係者のご協力ご支援をいただいたことに対し、心から謝意を表します。

第Ⅱ章 環 境

1 地理的環境

南山浦古墳群は、横石塚古墳の集中で知られた石清尾山古墳群の支群として把握できる。ここでいう石清尾山とは、狭義の石清尾山——峰山とも通称される——を要の位置に、その東の室山、南の淨願寺山と各々標高100m余の峠で結ばれた平均200m強の独立山塊をさす。山塊の周囲は、平地で北から東にかけては市街地が広がり、南から西の一帯は新興住宅がみられるものの、いまだ田圃地帯の趣が濃く感じられる。古代においては、東にのびた家並のあたり、特に、新川、春日川の下流域は数kmに及ぶ湾入が考えられている。また、高松平野最大の河川香東川は、山塊の西裾を北流するが、かつては、石清尾山塊の南で分かれ山塊の東にも流れ出していたことが、条里制の乱れで認められる。これらの河川に、香東川の西を流れる本津川をあわせて4ないし5本の河川によって形成されたのが、県内有数の沖積平野、高松平野である。

2 歴史的環境

高松平野においては、旧石器、縄文時代の遺跡が平野南縁に点在するに過ぎない。弥生時代前期前半の遺跡も知られていない。今後の調査に期待するところ大である。

弥生時代前期後半になると、海浜近くに天鏡、平野南縁に光専寺山、南東の奥まった所に香大農学部構内の各遺跡が出現する。三者三様の立地は、様々な条件の箇所ですばやく開発が行われたものと解釈したい。しかし、続く弥生中期前半の遺跡は発見されておらず、確実に遺跡が存在する中期後半まで、相当長期間の空白がみられる。第Ⅰ様式新に相当する遺跡の増加、第Ⅱ、Ⅲ様式での減少、第Ⅳ様式における再度の増加は、高松平野に限らず讃岐全域に共通する傾向で、その理由は解明されていない。

中期後半の遺跡としては、峰山の摺鉢谷遺跡をはじめ、平野南部の中山田、東縁の久米池南遺跡が代表的である。いずれも高地性集落で、なかでも後者は、平入構造の高床建物を描いた絵土土器片や、鉄剣、鉄斧、鉄鎌、鉄鏝等多量の鉄器が出土している。集落の中心には、独立柱建物が位置し、竅穴住居跡やテラス状遺構、土壘墓等の遺構が周囲に規則的に検出できた。祭祀的遺物、豊富な鉄器、特異な集落構造等の特色は、高地性集落のなかでもより高度な政治化軍事化が図られつつあった集団の所産と推測するに十分である。

遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて、爆発的に増加する。後期初頭の大空遺跡をはじめ、大空南、南谷、久米池南、川添浄水場、下司、葛谷、三谷三郎池、大池、田村神社、佐料の各遺跡の他、南山浦古墳群の近傍にも奥ノ池、南山浦、片山池下の遺跡が知られている。高松平野の至る所に存在するこれらの遺跡は、人口増加、水田拡大、分村等の要素が複雑に絡

みあった結果の現象であろう。ただし、各遺跡における具体的な構造、展開等については、調査が実施されていないため、今後に限らなければならない。

峰山の下ノ山遺跡からは、銅鏃二口が出土している。高松平野南奥に所在する大原神社の銅型銅劍一口とあわせても、平野全域で三口と極めて少ない青銅器保有量である。

古墳時代以降の遺跡は、所々から土器が出土するのみで不明なところが多い。

生産遺跡では、高松平野南縁の三谷三郎池西岸窯跡が目される。本体のほとんどは失われていたが、朝鮮半島に源流をもつと推察できる古式須恵器が得られている。同じ南部の公洲池にも須恵器窯跡が知られている。瓦窯では、南山浦古墳群の南400m余に位置する片山池窯跡と、その南300mに所在した南山浦1号窯跡があげられる。ともに後述する坂田庵寺に関連する瓦窯である。

墳墓では、久米池南遺跡において検出した土壇墓三基が目される。弥生時代中期後半のもので、共同墓地から隔絶した立地のうえ、少しばかりの盛土も考えられる。さらに、1号土壇墓には、鉄剣一口の副葬が認められる。かなり早くから集団構成員を脱却し、卓越しつつあった有力者の存在を知ることのできる貴重な遺構である。後期から古墳時代初頭にかけては、墳丘墓や甕棺墓等が平野の縁辺の小高い丘陵上にみられるようになる。円養寺・権八原C地区・三谷通谷の各遺跡が代表例であろう。古墳時代をむかえるための素地が準備されていたのであろう。

そうした背景のなかで、南山浦古墳群の北東1km余の石清尾山塊の一角に出現したのが、積石塚の前方後円墳、鶴尾神社4号墳である。先端がバチ状に開いた前方部をもち、後円部中央には長大な竪穴式石室をもつ。さらに、伝世鏡論の根拠となった船載の獣帯方格規矩四神鏡一面が副葬されていた。墳丘から出土した土器は、庄内期併行と目され、県下はおろか我が国でも最古段階の前方後円墳として位置づけがなされる。一方、南山浦古墳群の北方、峰山頂部の西肩部に位置するのが、石清尾山古墳群中最大の積石塚で双方中円墳の猫塚古墳である。多数の埋葬施設が存在から、墳丘墓の性格が色濃いついわれる。出土土器から、鶴尾神社4号墳に次いで築造されたと考えられる。猫塚古墳と反対側、峰山頂部の東肩部に位置するのが、前方後円墳・築塚古墳である。その位置から南東に降る尾根に立地するのが鶴尾神社4号墳で、4基の円墳もその前後に並ぶ。

一方、北に向かって幾つかのピークを持ちながら走る背陵に、前方後円墳の小塚古墳、同じ前方後円墳で朝放式石棺をもつ石船塚古墳、双方中円墳の鏡塚古墳が位置する。さらに背陵先端には、方墳の北大塚東、前方後円墳の北大塚、北大塚西の各古墳が一同となって所在する。その一同と、深く切れ込んだ摺鉢谷をへだてて対峙するのが、前方後円墳の石清尾山9号墳である。背陵の西側斜面には、現在亡失しているものの、小型の積石塚が二十数基、存在したと

いうが詳細は不明である。また、空山の横線にも、前方後円墳の稲荷山1号墳、稲荷山姫塚古墳が並び、北端には、群中最大の円墳、稲荷山北端古墳がみられる。その他、淨願寺山北端や妹山、空山の尾根筋には、小規模な積石塚古墳が幾つか知られる。亡失したものをあわせると、その数41基の積石塚古墳が確認されている。

これらのうち、前方後円墳や双方中円墳は、3世紀末ないしは4世紀初頭と推定される鷲尾神社4号墳を初源とし、西世紀末から五世紀初頭に位置づけ可能な石船塚古墳までの、約百年間に集中して築造されたと推定できる。この間、高松平野において築造されたのが確実な前方後円墳は、後述する高松市茶臼山古墳と、横立山塚古墳の二基にすぎない。しかも、後者は、積石塚古墳であることを考慮すると、石清尾山古墳群を形成した集団が、経済的にも政治的にも種々の要素について卓越していたと考えるのが、妥当である。

石清尾山塊では、淨願寺山の南西端小丘陵上に、ガメ塚と呼ばれた石清尾山古墳群中、唯一の盛土前方後円墳が存在していた。高松工業高等専門学校の工事により未調査のまま消滅したため、詳細は不明である。

高松平野の東縁、久米池南遺跡の南に位置するのが高松市茶臼山古墳である。長大な堅穴式石室を有し、鎌形石二個を副葬した古墳で畿内の性格をうかがわせる。前期中頃の前方後円墳である。平野の西縁にも、前期の前方後円墳、横立山塚古墳が山の中腹の奥まった箇所に立地する。前方部盛土、後円部積石の古墳で、長大な堅穴式石室がみられる。円筒・形象埴輪の出土が伝えられる。

これらにやや遅れて出現する古墳としては、尾島先端の長崎鼻古墳、平野南部の三谷石船・船岡山古墳があげられる。いずれも、石船塚古墳と同じ朝杖式石棺を主体部に採用した盛土の前方後円墳である。石棺という共通項を持つものの、石清尾山の勢力を牽制するかのよう平野の縁辺に出現した古墳のもつ意味は重大である。先行して出現した高松市茶臼山古墳、遅れて築造された今岡古墳、前・中期古墳と推定できる高松平野西部の御既天神社古墳をあわせたこれらの古墳は、その多くが、前後の系譜が不明瞭で、孤独な立地を示す。石清尾山の勢力が衰退する頃、相次いで単発的に出現する古墳には石清尾集団に対する牽制といった政治的な背景を考えるべきかも知れない。

中期中頃から後半にかけての首長墓には、今岡古墳があげられる。高松平野の西部小丘陵上に立地する前方後円墳で、前方部から出土した長持形空心陶棺は、長持式石棺の祖形もしくは亜流であろう。その他の中期古墳は、石清尾山塊沖に浮ぶ女木丸山古墳が知られるぐらいである。後期前半の古墳も数少なく、山塊の西、本津川流域に立地し、現在は亡失した相作牛塚古墳が、この時期の所産と考えられる。中期中頃から後期前半の古墳は、県内でもあまり知られていない。前期古墳の集中、以降の古墳数の激減は、讃岐全域における顕著な傾向と指摘でき

るのである。もちろん、石清尾山塊でも同様で、小型の積石塚を中期の所産とする仮説も有力ではあるが、同説が成立するとしても、巨大な積石塚を山頂に登々と築きあげてきた集団の彼裔としては、みる影も無いといわざるを得ない。

後期後半になると、横穴式石室を主体部に採用した古墳が、高松平野を限る山々の麓に多くみられるようになる。単独立地、2～3基で構成される小古墳群、10基前後の比較的多数で構成される古墳群と様々な形態を示す。特に、石清尾山塊には多数みられ、石清尾山古墳群と総称される古墳のうち、60%までが横穴式石室墳である。それらは、12ないし13の支群に分類できよう。最大の支群は、50基余が群集する淨願寺山古墳群である。山頂部を空間とし、その南に馬蹄状に密集する。全体の規格性、集中性等で県内屈指の古墳群といえる。それに次ぐ支群が、23基の奥ノ池古墳群で、18基の摺鉢谷西・石清尾山頂、13基の南山浦、8基の野山、それ以下の、峰山墓地、西方寺、御殿、片山池、木里神社、北山浦の各支群が知られている。淨願寺山と摺鉢谷西・石清尾山頂の両古墳群が山頂周辺に立地する以外は山麓に所在する。

ところで、山塊の横穴式石室で最大規模を有するのは、摺鉢谷西古墳群に属する石清尾山4号墳である。石清尾山古墳群中最大といえるものの、群を抜く存在ではない。高松平野の東部の久本・山下の両古墳、西部の御殿大塚古墳と古宮権現古墳は、巨石墳と呼ぶにふさわしい大型の石室を有し周囲を倒斜する。久本古墳には、石槨をもち承台付銅鏡が副葬されていた。古宮権現古墳からも、破片ではあるが鉄地金銅張鞍金具が出土している。石清尾山の横穴式石室墳では、現在までに、そのような優れた副葬品の出土を聞かない。石清尾山塊には石室規模、内容において画一性が存在すると考えられる。高松平野の東部や西部のように巨石墳が卓越する地域とは、集団構成に相違があると、認められよう。

古代寺院は、7ヶ所知られている。なかでも、南山浦古墳群の南方400m余に位置する坂田庵寺跡は、現在埋没しているが礎石群がみられる。観察可能な礎石は、円形柱座のある丁寧な造作のものである。また、寺域と推定される田畑からは、奈良時代初期以前と推定される金銅誕生釈迦立像が出土し、県指定の有形文化財となっている。出土瓦には、白鳳時代の年代観が与えられる。南山浦古墳群と密接な関係が想定できよう。さらに、平野東部の山下庵寺跡、宝寿寺跡、南部の下司寺寺跡、神宮寺庵寺跡、拝師庵寺跡、西部の勝賀庵寺跡が知られるが、詳細は不明である。

さらに、高松平野全域に条里跡が残る事実も注目しておきたい。特に、志度町多和神社に残る讃岐国弘福寺領田園の該当地と推定される地域は、南山浦古墳群の東方3kmの位置である。

高松平野の古代遺跡を列挙してみたが、少なくとも、南山浦古墳群の所在する石清尾山塊が高松平野のなかで重要な位置を占めることが判明したと思われる。



第1図 遺跡分布図I

第2区 遺跡分布図II
● 積石塚古墳(遺存) ○ 積石塚古墳(崩壊)
▲ 壘土古墳(現存) ○ 壘土古墳(崩壊)



遺跡・分布図地名表

1	横立山塚古墳	古前	42	坪師庵寺	奈
2	脚梨庵寺	奈			
3	かしが谷古墳	古前中			
4	佐料遺跡	弥後	43	西宝寺古墳群	古後
5	今岡古墳	古中	44	木里神社古墳	古後
6	相作牛塚古墳	古後	45	下山遺跡	弥
7	平水1号墳	古後	46	峰山墓地古墳群	古後
8	古宮権現古墳	古後	47	石清尾山頂古墳群	古後
9	国分尼寺跡	奈	48	石清尾山13号墳	古後
10	御殿大神社古墳	古中	49	摺鉢谷西古墳群	古後
11	御殿大塚古墳	古後	50	石清尾山9号墳	古前
12	兔子山遺跡	旧	51	石清尾山4号墳	古後
13	陶古窯址群	平	52	石清尾山3号墳	古後
14	田村神社遺跡	弥後	53	石清尾山2号墳	古後
15	神宮寺庵寺	奈	54	御殿古墳群	古後
16	船岡山古墳	古前	55	猪塚古墳	古前
17	万塚古墳	古後	56	摺鉢谷西古墳群跡	古
18	雨山南遺跡	旧	57	姫塚古墳	古前
19	三谷三郎池遺跡	繩弥	58	小塚古墳	古前
20	三谷三郎池西岸窯跡	古中	59	石船塚古墳	古前
21	三谷石船古墳	古中	60	鏡塚古墳	古前
22	光尊寺山遺跡	弥前	61	北大塚古墳	古前
23	中山田遺跡	弥中	62	摺鉢谷遺跡	弥中
24	円養寺遺跡	弥後	63	船尾神社4号墳	古前
25	葛谷遺跡	弥後	64	奥ノ池古墳群	古後
26	下司庵寺	奈	65	奥ノ池遺跡	弥
27	下司遺跡	繩	66	稲荷山塚古墳	古前
28	香川大学農学部遺跡	弥前	67	稲荷山北端古墳	古前
29	権八原遺跡	弥古	68	北山浦古墳群	古前
30	瀧本神社古墳	古後	69	野山古墳群	古前後
31	高松市茶臼山古墳	古前	70	淨願寺山古墳群	古後
32	久米池南遺跡	弥中	71	ガメ塚古墳群	古
33	久本古墳	古後	72	南山浦1号瓦窯跡	
34	山下庵寺	奈	73	片山池古墳群	古後
35	山下古墳	古後	74	坂田庵寺	奈
36	大空遺跡	弥後		片山池下遺跡	弥後
37	屋島城跡	奈前	75	片山池窯跡	奈
38	長崎鼻古墳	古中	76	南山浦遺跡	弥後
39	女木丸山古墳	古中	77	南山浦古墳群	古後
40	大溝遺跡	弥前			
41	大池遺跡	弥後			

第三章 南山浦古墳群

1. 位 置

高松平野中央部に所在する淨願寺山の東麓には、緩傾斜面が広がっており、峰山との接点、切通越に至る谷と、片山池が造られた小さな谷以外は、比較的単調な地形を呈する。古くから開墾されており、果樹園のなかに横穴式石室墳が、三ヶ所、群をなしてみられる。北から、野山、南山浦、片山池古墳群と各々呼ばれている。

そのうち、南山浦古墳群の占地する付近は、緩傾斜地が平地にむけてせり出したような地形で、現在は、東方と南斜面に果樹園地が立ち並んで、絶景とはいいがたいが、かつては、眺望のすぐれた環境であったことが容易に想像がつく。

古墳群の所在する東側背後の山腹は、徐々に角度を増して急傾斜となり、標高239m余の山頂部に至る。山頂は、丸味をおびたなだらかな地形で、そこに50基余で構成される淨願寺山古墳群がある。急斜面を度外視すれば、両古墳群の密接な関係を想定できよう。

左手に見える室山から峰山の南斜面・山裾と、淨願寺山の東山裾を二辺とする三角地帯は、比較的安定した平野らしく、古老によれば、旧跡の類が多いという。三角形の斜辺にあたる線上、即ち、淨願寺山南端と室山南端を結ぶ線上には、不規則な区画の水田が目立つ。かつて、香東川の流れが流れた跡である。その外側は広大な高松平野がつづき、さらには、平野の縁にあたる小高い山をみてとれる。古代人の奥津城としてうなずける地形と眺望である。

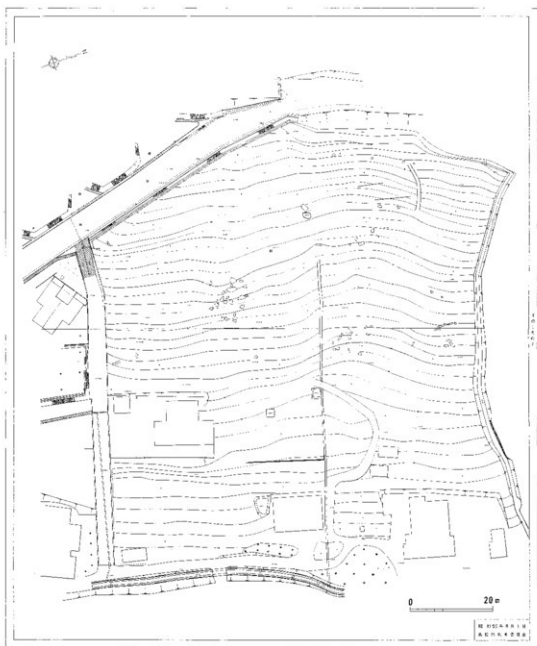
2 分 布

古墳は、13基が確認されている。石清尾山古墳群では中規模の支群である。横穴式石室を主体部に採用した盛土墳で、石清尾山に多くみられる横穴式石室墳と変わる所がない。しかし、開墾のため、13基全ての石室は破壊され、用材と思われる石が、畑のあちらこちらに転石としてみられる。また、墳丘が僅かに残存する1、2、4、11号墳を除き、他は痕跡さえ認められない。

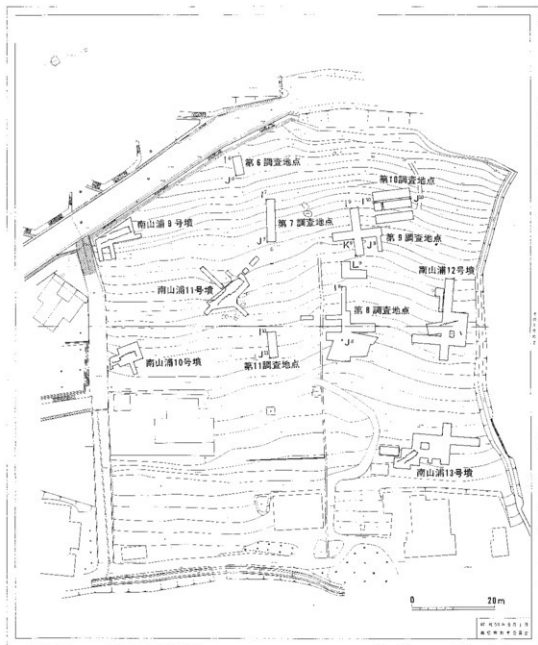
分布範囲は、楕円状で、南北に沿う長軸長約200m、東西の短軸長約100mを測る。最南端にやや離れて立地するのが1号墳で、最北端には、12、13号墳が位置がする。

2号墳以下11号墳までは、両者の、ほぼ中央周辺に築かれており、特に、2、4、5、6、9号墳は最高所で集中する傾向を読みとれる。

分布範囲の標高は、25m～45mを測り、上方は急傾斜となり、古墳の存在する余地は無いと思われるが、下方は宅地のため大幅な地形変更が行われ、さらに、古墳群の南北にも緩傾斜地がそれぞれ広がる。下方、南北には古墳存在が可能で、分布範囲の拡大が考えられる。



第3図 調査区域実測図



第4図 調査地点配置図

3 観 査

南山館古墳群の調査には、今回の調査と、県教育委員会によって実施された昭和47年度の調査とがある。後者は、興宮西春日岡地の建設に先立って実施されたもので、古墳群の南半分。1～6号墳までのうち、3号墳と6号墳を除く四基が対象となった。6基の古墳は、現在は団地のため、破壊されたか埋没したかで、観察はできない。今回の調査は、古墳群の北半分、9号墳から13号墳までが対象である。その他7号墳は、大きく破壊されながらも現存しており、8号墳は、土地所有者が宅地造成をする際に、知らずのうちに破壊されたらしい。現在、庭には古墳の石材が幾つもみられ、同所から掘り出したとの話から、古墳の存在は間違いないものと考えられる。

従って、発掘調査された古墳は、昭和47年4基、昭和59年度5基の計9基で、未調査は4基である。調査された古墳は、全体の69%で、古墳の調査率としては、県内でも高い方に属する。

なお、昭和47年度の調査は、未報告で、今回の調査にあたっては、当時の調査担当者から多くのご教示をいただいた。記して謝する。

Ⅲ-1 南山浦9号墳

墳 丘

調査対象畑地が鈍角をなす南西隅に位置する。昭和47年に調査された2、4、5号墳および未調査の3号墳の計四基が上方に存在していたらしく、これらの古墳とともに南山浦古墳群の中一グループとして分類することもできる。標高38m余で、今回調査した古墳のなかでは最高所のものである。10号墳は、東下方52m余に、11号墳は、北東下方56m余に各々立地する。

古墳は、テラス状に整えられた畑地に、その全体を埋没させていた。僅かに右玄門石の頭部がのぞいていたのみで、表面観察によれば、墳丘の遺存は全く予測できなかった。また、石室の西側と南側は、道路の擁壁と側溝によって切断されており、羨道部先端は別にして、石室が、道路工事によって破壊されていなかったのは幸運といえよう。

表面観察では不可能であったが、石室調査区壁面で、厚さ1m余を測る墳丘の遺存が確認できた。石室の中程から奥にむかって弧を描くように検出できた暗灰黒色粘質土層が盛土にあたる。この土層は10、11、13号墳にもみられるかたく敲きしめたもので、弥生土器片が含まれることもある。本古墳群が形成された山裾には、同層の存在や、弥生土器の散布が認め難いところから、眼下の平野部より運ばれたと解される。

石 室

横穴式石室は、斜面にほぼ平行して構築されていた。主軸は、N-Oで、真南に開口する。石室のほとんどは用材が抜きとられ、羨道部先端は先述した南側道路によって切断されて

いる可能性がある等、破壊が著しく基底石が残存していたに過ぎない。現長7.85mを測る石室の各部の計測値は、次のとおりである。玄室長4.75m、玄室幅-奥壁部1.65m、中央部1.5m、玄門部1.7m、羨道長3.1m、羨道幅-玄門部0.95m（推定）、先端部1.15m、床面からの現存高の最大値は、玄室1.18m、羨道0.65mである。

左袖石が抜き取られているため、石室の形態には若干の疑問が残る。抜き取り孔が、袖石を据えた跡に一致するとすれば両袖石が羨道、玄室側面から突出した形状を想定できる。一方、玄室長は、南山浦古墳群中最大の数値をとるが、玄室幅は、群中の4m以上を越す玄室長をもつ四基の古墳のなかで、最も幅が狭く、ひとまわり小型の石室をもつ2号墳の玄室幅と、ほとんど同じ数値をはかる。従って細長く奥ほどせばまった石室で、南山浦古墳群中では目立った存在である。

残存する基底石は、全て安山岩である。石室の奥壁には1.3㎡余の平面をもち、厚さ約0.7mの一枚の大型石材が鏡石として使用されている。鏡石の最大横幅は、1.6mであり、玄室奥壁幅とはほぼ一致する。両側壁の最奥基底石は、鏡石を挟むように置かれている。従って、鏡石の横幅が石室の規格に影響していると考えられる。

玄室側壁の基底石は東西ともに6石で、西側の奥より2石目がかぎ取られ破壊している他は完存している。両側壁の石材と使用方法は、顕著な相違が認められる。山側にあたる西側壁の石材は、東側壁に比べて小ぶりで、特に奥2、3石目は立てて使用している。

西側壁に対し、横幅、高さはもちろん奥行も十分な石材を寝かす配慮をした構築法が山裾の東側壁に読みとられる。削平によって生じた安定な地山直上に基底石を据えることができた西側壁に対し、傾斜のために崩れやすい東側壁には、安定をはかるために大型の石材を用意したのであろう。

基底石各々は切り出し時が構築時に加工したと思われる割り石で、内面を揃えられている。さらに高さの足りない基底石には、小さな石材を重ね高さを補う等して、基底石の上端のラインが通るように配慮されている。このような構築法は、他の多くの横穴式石室でも観察できる一般的な傾向である。

羨道は、先端が破壊されている可能性が高いが、残存部では、構築法は玄室と余り変わらない。現存する右袖石は、方柱状の石材で用材としては鏡石に次ぐ大きさである。袖石の三面は、床面に対してほぼ直角をなす。また、頭部は水平な面をもつ。自然石というより割り石との感を強く受ける。玄室床面には、幼児の拳大の円礫がすまなく敷かれている。ただし、玄室最奥部の壁面際の部分には礫数がみられない。一方、礫数は羨道の中ほどまでのびていて、先端から玄門のあたりが三重ないしは四重に礫が敷かれ最も厚く、玄室中ほどから奥にかけては漸次薄くなる。玄門部においては、分厚い礫敷の下に30cm余大の平らな塊石が石室主軸に直交し

て三個並べられていた。礎敷前の床面——原床面を少し掘り、頭を少し出している。明らかに礎石であるがそれを厚い膠層で覆うところから、礎石の役割は果していない。床面下には、排水溝は見えなかった。分厚い礎敷は十分に代役を果したのであろう。

玄室奥の方で30cm余のやや扁平な安山岩塊石が、12個置かれている。棺台石であろう。

なお、後述するように、床面に接する出土状況を呈する後世の土器が、特に玄室中程で多く得られた。従って、再利用時に床面礎敷が破壊されたり、棺台石が動かされた可能性があることを付記しておく。

調査に制約があったため、十分な説明はできなかったが、あえて石室の構築方法を想定してみたい。斜面を大きくカットし基底石を置いた後、30cm前後地山の土をたたきしめながら原床面を構成する。その原床面に礎敷を覆って床面としている。以下石室を構築しながら墳丘をも形造ったのであろう。

遺物

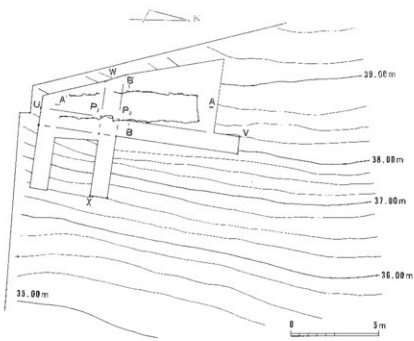
古墳に伴う遺物はきわめて少ない。104は、玄室左奥隅で床面レベルより深く埋められた状態で検出された土師器杯で、器表の剝離が著しい。105は、羨道より出土したもので体部に暗文がかすかに残っている。端部が僅かに内湾しかつ肥厚する。後述する10号墳出土の土師器暗文杯がわずかに高い器高をもつ以外は、細部まで類似する。

須恵器のうち101は直口壺蓋の可能性もある。102は、10号墳にみる台付ガラス状土器と思われる。103は、床に敷かれた礎間から出土したもので脚である。

103同様な出土状態を示すのが、金環132～134及び、ガラス玉106～130である。金環は、131が、羨道部より浮いた状態で出土した他は、玄室中央に出土している。131.132は、金箔が完存している。計測値から対であろう。残り二個も同様である。ガラス玉は全て風化により表面が剥落し、光沢を失い、色も完全に消滅している。質は余りよくないのであろう。

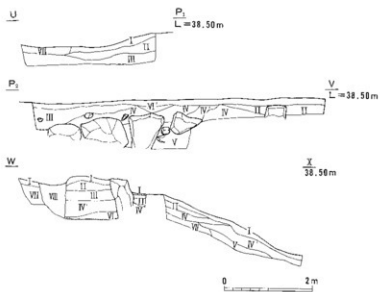
幾つかの出土品が類似するところから9号墳の築造年代を、10号墳と併行する時期、7C中頃としておく。

9号墳から多量の再利用時の土器を得た。器種は、全て土師器で小皿135～137、皿138碗139～143羽釜144鉢144鍋146がある。そのうち鍋が、第Ⅲ層の角礎層中にみられただけで、他は第Ⅳ層の床面直上から出土した。これらは、埋葬終了後における再利用時の遺物として認められる。土器の器種からして、常時とはいえないにせよ、生活がおこなわれていたのであろう。なお土師器碗のうち、139は、器表が剥落しているためにわかに認めたいが瓦器の可能性があり、他は全て内面黒色土器である。11号墳の土師碗より少々後出すると思われる。

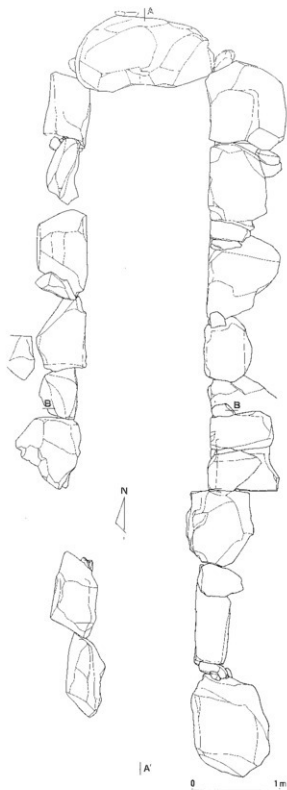


第5図 南山浦9号墳地形測量図

- I 新土層
- II 茶褐色粘質土層
- III 淡灰色粘質土層
- III' 淡灰色粘質土層
(角礫を多量に含む)
- IV 暗灰色粘質土層
(土塊の盛土)
- IV' 暗灰色粘質土層
(ブロック状)
- V 暗灰褐色粘質土層
- VI 淡灰色粘質土層
- VII 茶褐色粘質土層 (地山)
- VIII 擾乱層



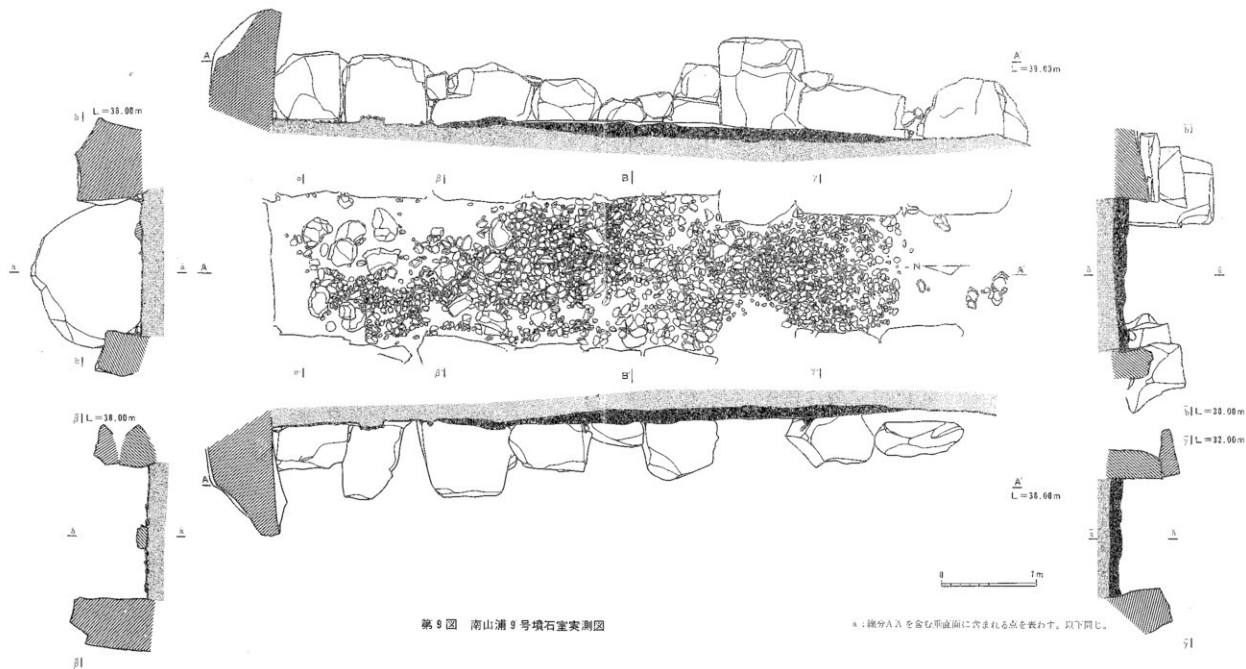
第6図 南山浦9号墳土層図



第7図 南山浦9号墳石室上面図

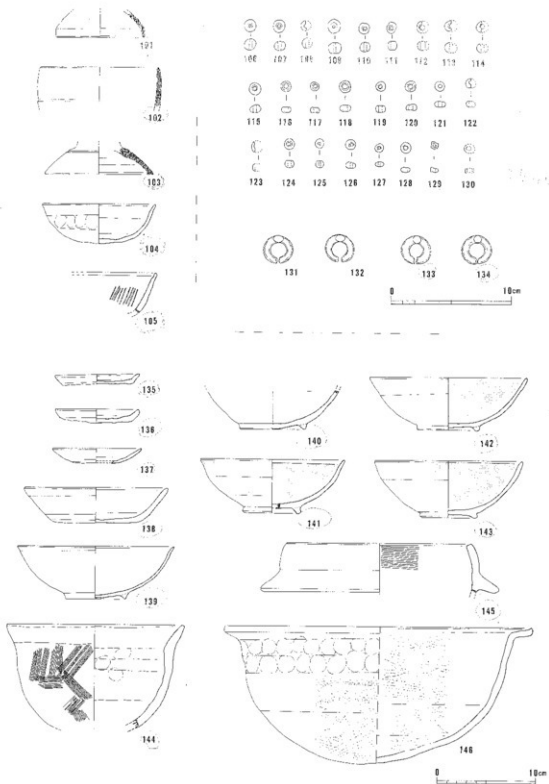


第8図 南山浦9号墳遺物分布図



第9図 南山浦9号墳石室実測図

※：断面A-Aを含む平面図に含まれる点を表わす。以下同じ。



第10图 南山浦9号坑遗物实测图

Ⅲ-2 南山浦10号墳

墳 丘

調査対象地の南縁、標高31m余の斜面に位置する。前面には急坂の道路が土地を区切っている。9号墳が上方52mに、11号墳が北53mに、下方の宅地には、既に破壊された可能性のある8号墳が各々位置していた。倒れた鏡石と、羨道部にあたる石材の各々頭部が地表にみられたことから、古墳と知れるのみで、墳丘は、開墾により著しく変形を受け現状では観察できなかった。しかし、石室を中心に設定したトレンチによれば、石室の西側一山手側では80cmと相当厚くたたきしめた暗灰黒色粘質土層が9号墳と同様に確認できた。古墳の盛土で、弥生土器片を含む。

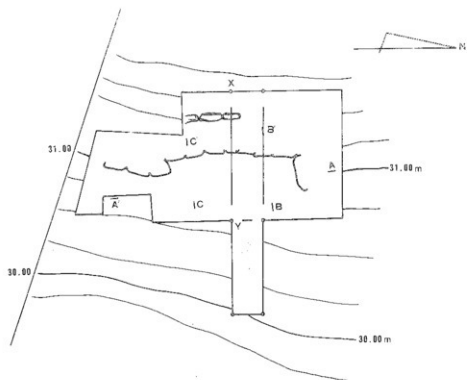
石室東側では、同じ土層は薄く確認できたに過ぎない。開墾と流出による結果であろう。

石 室

検出された横穴式石室は斜面に斜交して造られ、南々東方向に開口する。開墾等によりほとんど破壊され石材の多くを失っている。特に、東側壁は全て抜き取られ、詳細な調査を行ったものの、痕跡さえも認められなかった。奥壁は、一枚石でそのまま石室外側に倒れる途中で止まった状況の鏡石がみられた。復元すれば、高さ1m余になるであろう。西側壁では、羨道部も含めて基底石が比較的よく保存されている。石材は、全て安山岩であるが袖部を境に大きさと使用方法が異なる。羨道側は、袖石も含めて大型の石材を同一線上に立てて方柱状に使っている。それに対し、玄室側では、小型の石材を横に使うことが多い。また、袖石に並ぶ羨道壁は、外側に開き気味である。玄室は、やや湾曲がみられ、胴張りとも考えられる。袖石は、高さ0.9m、厚さ0.5mで、厚さが袖部の計測値になる。床面には、5～10cm大の安山岩割石が、15cm程の厚さで敷き詰められ疎密はない。なお、床面より数cmの高さを有する数個の石は、棺台石となる可能性を有する。ただし、原位置を保っている例が少ないので詳細は不明である。床石としては、比較的大きな石が床面の中心線一石室主軸にそって並んでいる。最初、排水溝の蓋石と考えていたが、床石を全て取りはらった時点では溝を検出できなかった。羨道部の床面敷石と樞石は検出できなかった。最初から設けられていなかったのであろう。玄室床面は、東南隅の一部を欠くのみである。従って、次のとおり玄室の復元が可能である。主軸N-6°-E、石室長5.95m、玄室長3.8cm、玄室幅一奥壁部1.25m、中央部1.65mm、玄門部1.65m（推定）羨道長2.15m、現存高一羨道部0.6m、玄門部0.9m、玄室側壁部0.55m（推定）

石室の構築は、地山をL字状にカットし、石室全体よりかなり大きめの削平面を造り出す。さらに、基底石に適切な振り方を設け安定をはかっている。

なお、石室外、墳丘内に3個の細長い石材を並べた石列が、石室主軸にほぼ平行して検出で



第11図 南山浦10号墳地形測量図



- I 耕作土層
- II 茶褐色粘質土層
- II' 茶褐色粘質土層（黄褐色土をブロック状に含む）
- III 淡褐色粘質土層
- III' 淡褐色粘質土層（砂を一部含む）
- IV 暗灰黒色粘質土層（古墳の盛土）
- IV' 暗灰黒色粘質土層（ブロック状に観察できる）
- V 暗灰褐色粘質土層



第12図 南山浦10号墳土層図



きた。床面中央にみられた石列とともに、石室構築に関連する遺構と考えておく。

遺物

10号墳の遺物は、ほとんど混乱され、原位置を留めているものは、少なかった。そのなかで袖石の脇に、やや離れて検出されたのが、土師暗文杯等である。210は完形で裏返しに置かれて出土した。きわめて緻密な胎土で底部内面に螺旋が、体部内面に放射線が各々施こされている。同じく裏返しにして、前者の近くに検出されたのが211である。暗文の施文法は同様であるが、径が大きく、端部が内湾し、肥厚する。やや保存状態が悪く、破損が顕著であった。

二個の暗文杯に、さらに、重なっていたのが、須恵器の台付ガラス土器206である。ただし、半完形にも満たないため、混乱のおり移動したのであろう。207は、胎土からみて前述須恵器の脚になるであろう。

須恵器杯201は径の小さい小型品で、杯の身と蓋が逆転する直前のものと考えられよう。高杯は、3個体202、203、204、205ある。ともに無蓋で小型品に分類できるものである。平瓶208は、肩部に稜をもつ。その他、台付長頸壺209がみられるが、10号墳出土の須恵器は、既して小型品が多い。

装身具では、一対の金環212、213が、玄室中程で出土している。いずれも9号墳出土例よりも小型品である。

鉄器214～217は、鏝もしくは、釘と思われる細い棒状の鉄器が若干検出されたに過ぎない。

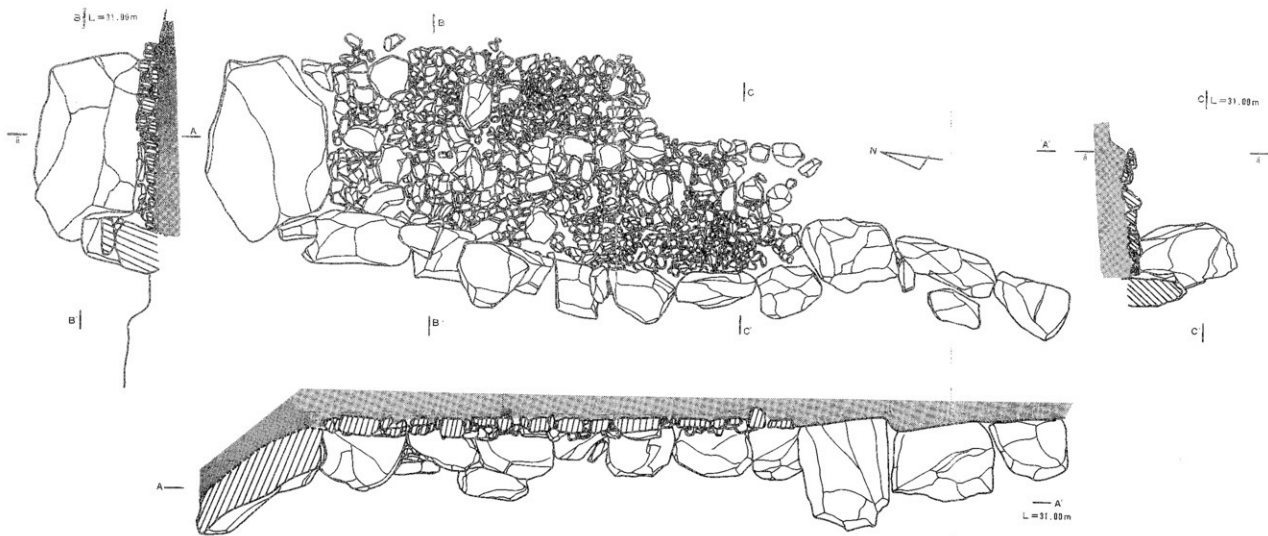
出土品より、逆転前杯の存在は古い要素としてとらえられる。しかし、全体に小型化し美道部に形骸化した手法を採用するなど、横穴式石室築造の末期の所産と考えられよう。7世紀中頃と考えておきたい。平瓶の存在等から、降った時期の追葬も考えられる。

墳丘盛土に混入して弥生土器が出土した。220は、壺口縁端部に凹線文を施した上に、波状櫛書文を施し、さらに円形貼付文で飾る。外反した口縁内面にも、波状櫛書文を施すなど、装飾に富む。219は壺口縁、221は甕口縁、218は鉢口縁である。これらの土器は凹線文を採用するところから弥生時代中期後半の土器と考えられる。墳丘に使われた粘土は、近くの平野部から運ばれたに違いない。弥生土器は、採土時の混入であろう。とすれば集落もしくはそれに類する遺跡が、近くに存在するといえよう。

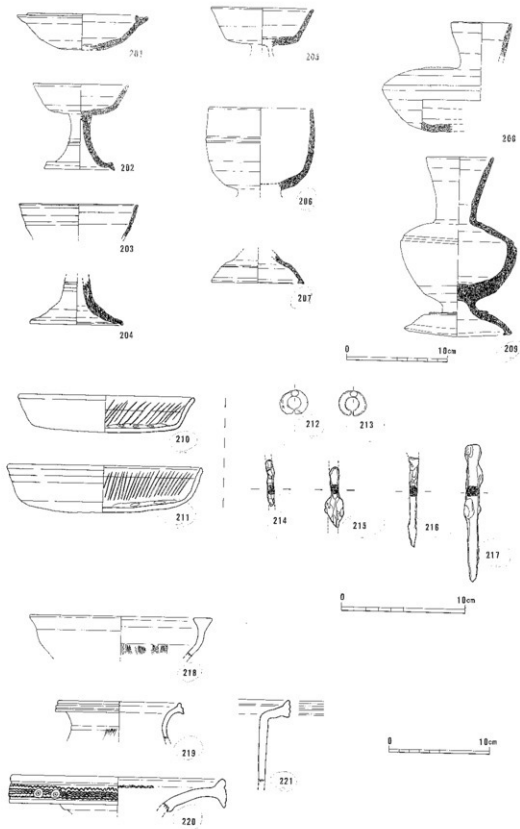
Ⅲ-3 南山浦11号墳

墳丘

調査対象畑地の中央南よりに占地する。各古墳との位置関係は次のとおりである。9号墳南西56m、10号墳南々東53m、12号墳北92m、13号墳北東104m。今回調査の古墳のうち地形図で墳丘の遺存が確認できた唯一の事例である。標高34～36m余のコンタラインは、古墳の



第13图 南山浦10号填石室平面图



第14图 南山浦10号墳遺物実測図

周辺で外に満ちている。明らかに自然地形と異なり、付近には30個余の安山岩が散乱し、古墳が空容すると容易に認められた。墳丘は調査前の計測によれば、既数で、長軸12m、短軸8m、高さ1.5mの数値を得た。

発掘調査では、石室を中心に各々直交する4本のトレンチを1m幅で設定した。そのうち南西にのびたものからは、墳丘にあたる敷きしめた暗灰黒色粘質土層と、幅3m、深さ0.9m、の周溝が検出された。北西トレンチでは、石室奥壁背後で、地山を深く削ぎとったようなカットした跡が確認できた。石室背後とカット面の間には、盛土の暗灰黒色粘質土層が存在していた。しかし、カット面より北西側では、地山が認められ暗灰黒色粘質土層によって墳丘を構築した痕跡は、現状では確認できなかった。北東に延長したトレンチでも、石室近傍以外は、地山であった。

石室現状から考えて、墳丘は現在より高かったと考えられる。従って、墳丘下部は地山整形により、それより上部には暗灰黒色粘質土層による盛土があったものと解釈できる。また、石室側壁の構築を確認するため石室西側に設定した全長1.6mの試掘区でも盛土が確認できた。北西、南西トレンチの状況とあわせ、石室構築前に石室奥の地山カット面から、石室東側、いはいえれば墳丘全体の1/4～1/3にあたる部分を削平したものと考えられよう。

なお、10号墳と同様、弥生土器片が多数出土している。盛土が古墳造営のおり平野部から運ばれた証拠である。

石室

斜面に斜交し、南東に開口した横穴式石室が検出された。主軸N-24.5°-W1石室長9.3m、玄室長3.9mあるいは4.3m、玄室幅-奥壁部2.0m、中央部2.2m、玄門部2.0m、羨道長5.4mあるいは5.0m、羨道幅-玄門部1.25m、先端幅1.3m、現存高-玄室部1.8m、玄門部1.15m、羨道部0.9mを各々計測する。

石室の石材は墳丘に散乱している用材と思われるものも含めて、全て安山岩である。そのうち玄室奥壁の基底部は、約2.1㎡余の大きな平面を持つ石材と、柱状の石材とで構成されている。この二石によって形造られる玄室奥壁の幅は、南山浦古墳群中最大値を示す。従って、ただかだか4m余の玄室長であるが、その床面積は大である。また、側壁の状況から奥壁は、現状より高いことが明らかであり、かなりの石材が抜き取られているといえよう。

側壁はやや胴張り呈する。東側は、一段4個の基底石が遺存しているのみである。用いられた石材は、1.3m×0.5m×0.5m余の大きさで、小口面を横に使い面を揃えている。各々の基底石上端面も、ほぼ同じ0.6m前後の高さを有し、ラインが通るように工夫されている。西側壁では、高さ1.8m余の残存高を測り、3段が遺存するが、各段間はラインがハッキリ通る。最下段基礎石は4石で、二段目は1石抜き取られている回。三段目は、大型の石材1個しか残

っていない。中央基底石は大型で、東側のそれよりやや高い感を受ける。9号墳と同様な、山側では立てて、山麓側では横に寝かせた使用している部分がある。二段目は同じような厚さの石材を横に用いる。三段目として残る一石は、横1.3m高さ0.85m奥行き1.2mの大きなものである。その背後に設定したトレンチでは、石材の底部にそってかなり掘込んだが、下段の石材を石室外側から検出するには至らず、崩壊の危険があるのでやむおえず中止した。それにより、同石材の構築時点で、安定をはかるため、二段目上端まで墳丘の盛土が行われていたと考えられる。また、同石材は石室内に30cm余せり出している。荷送技法の採用である。同方法の採用にあたって、三段目大型石材の石室面は、内傾しており、基底部を起点とした石室断面に、違和感なくとけ込んでいる。用途に適した石材を厳選したのか、加工した割り石かのいずれかであろう。

石室は両袖式の形式をとる。両袖石はともに立てられた直方体の石材で、平坦な上面の長軸を各々、石室主軸にあわせている。しかし、注目すべきことは、両袖石によって造り出された袖部が、主軸と直交した直線上に並ばず、約40cm程喰違っていることである。両袖式の石室において、袖部の幅が違うためシンメトリックでない事例は多くみられるが、その逆は果内でも稀であろう。

喰い違いが生じた理由は、石室構築過程において、両袖石が同時に据えられなかったため、構築途中に別々に据えられたため齟齬をきたしたのであろうか。

羨道は南山浦古墳群中最も長いもので、袖石の玄門側の面と、羨道側壁面とが一致する。その羨道側壁は、西側がよく遺存していた。斜面下方にあたる東側壁では、長さにしてその半分余しか遺存していない。東側壁は、ほぼ2段に積まれ上端と段間にラインが通る。西壁では、同じ高さを有する石材が用いられた部分もある。ところで、羨道基底部はやや外側に開き気味となる。主軸が、斜交するため、直線的に羨道を構築すれば、羨道先端の床面は、玄室床面に対し、著しく低くなり、甚だ不都合である。そこで、羨道を等高線に平行気味に築くことにより、床面の低下を避けようとしたと、考えられる。

床面は、5～25cm余の扁平な安山岩の石材を敷く。その際生じたすき間には、嬰兒の拳大の円礫をつめている。特に玄室奥ほど、その様な傾向が顕著である。床石は、羨道の途中までのびるが、樞石はない。峰山における摺鉢谷西古墳群中の石清尾山2号墳に、同じ床面を見出せるが、果下では例外的な存在といえる。敷石の先端の近くにあっては、円礫が全くみられない。また玄門部の敷石上に、土器片を敷込んだ石材が見い出せた。閉塞石の可能性がある。

床面の一部に数cm高いような部分、あるいは円礫が多い部分などがあるが、棺床というには根拠にかけらがある。

床面を取り除くと、素掘りの排水溝が検出できた。総延長7m余、平均的深さ0.2m前後の

排水溝は玄室奥から始まり、羨道先端まで掘られている。ただし排水溝内に後述する床面直下の土師器片が余り落ち込んでいないので、古墳築造後きわめて早い時期にその機能を終了していたのであろう。

本古墳では、今回調査古墳のうち唯一天井石が残存していた。玄室用一個と、羨道用二個である。ともに崩壊した石室を覆って残っていたもので、前者は、2.25m×1.1mの大きさで厚さは0.9m余である。位置からして玄室の玄門寄りを覆ったのであろう。後者のうち一石は1.5m×1.1m、厚さ0.74m余で、残りもほぼ同じ大きさで、前者よりひとまわり小型である。

遺物

11号墳では、多量の遺物が得られた。6層に分けられた玄室内の土層のうち、第IV層に少量第V層には多くの古代末から中世の遺物を含んでいた。第VI層は床面直上の土層で、古墳時代の遺物——いいかえれば、古墳の副葬品が出土した。古墳時代の土器は、計42個体分確認できた。そのうち、須恵器は、27点を数える。ほかにも、図示しなかったが、大妻の破片と覚しきものもみられる。鉄器は52点確認できた。ただし、第V層中に混入していたもの、細片となっていたもの等があり、それらはあえて図示を避けた。第IV・V層出土遺物は、代表的なもの、40点図示したが、実測可能なものはさらに多い。それらは、今後に譲りたい。

古墳時代遺物の石室内での分布には、次のような性格が認められる。須恵器および土師器の土器類は、羨道および玄室左半分にみられる。特に左袖部には、土師器高杯2点、須恵器杯身3点、杯蓋3点、高杯2点、提瓶1点、平瓶1点、直口壺1点の計13個体が集中していた。破損がみられるものも一部にあったが、多くは完形であった。さらに、左側壁に立てかけたような出土状況を呈する須恵器がある。左袖部から奥にむかって順次、杯蓋、杯身、提瓶、杯身、杯蓋、と置かれ、最奥隅には提瓶が発見できた。この提瓶には、9号墳土師器杯と同じ性格が与えられていたのかも知れない。

玄室では土器がその他に、中軸線上もしくは幾分左寄りに破片が分布する。玄室内右寄りに出土地点をもつ須恵器は、高台付杯身の一点のみである。

玄室主軸左側には鉄器が多くみられ、右寄りには、轡、鎧等が検出されただけである。

このような玄室内の遺物配置は、再利用による結果なのか、本来のものなのか不明である。

羨道では、須恵器長頸壺320と土師器杯333が完形で検出された以外は、破片として検出された。特に土師器暗文杯と土師器甕、須恵器平瓶は羨道一帯に破片が散乱していた。これら散乱した土器は完形近くに復元された。再利用時にこれらの土器が同所で破壊され破片を失なわれなかったことを示すもので、最初から破砕されて副葬された可能性が高い。

(須恵器)

杯蓋301～305、杯身306～312、は、6世紀末から7世紀初頭の特徴を示す。305には、窯壁

が付着し、304には、火罨がみられる。302と306のように幾つかのセット関係が認められるようである。その他、杯蓋313と高台付杯身314はセットをなすが、形態から7世紀後半のものであろう。最後の追葬に伴う副葬品であろう。有蓋高杯316は、長脚で二段透しを有するもので、317の存在から二個体以上存在したらしい。但し、317の透しは、完全に施こされず彫化が認められる。前者よりやや後出するものか。315は、脚取り付け後、透しを造り出した痕跡——切り取り跡が認められるので無蓋高杯としておく。貼付けつまみをもつ平瓶322、323はともに美道から出土している。321は窯記号が口縁部にみられる平瓶で、体部径をはじめとした大きさが322に類似する。しかし、前者では、器面に補修のため粘土を貼付けた痕跡が容易に認められるほか、口縁部の取付け跡を、ナデによって完全に消していない等、後者に比べやや雑な感をうける。なお、322にも窯記号らしきものが、口縁部にみられる。ただし、成形後かなり乾燥した後で先の鋭く尖った工具で描かれたらしい。瓶318は、玄門付近から玄室中程に破片が散乱していた。直口壺319は、口縁部に平瓶321と同じ窯記号をもつ。色調に微妙な相違はあるものの、胎土焼成に共通性が認められる。罎324は、ラップ状に大きく開く口縁と、相対的に小さな体部をもつ。口縁内面、外面の多くに自然釉がみられる。提瓶は、小型品325、326と大型品327に分けられる。小型品の体部は平瓶321の体部に形状調整方法などが似ている。特に325にみられる窯記号は、321にみられたものと同じと考えてもよい。ほかに同様な、焼成、胎土を示すものがあり、それらは、葬儀用に一括して製作されたと考えられよう。327は肩部分に耳を取り付けるが、ほとんど退化したものである。同じ色調を呈し、胎土も変わらないと認められるものに、無蓋高杯315、杯蓋301、302、杯身308、306がある。同時焼成の副葬品と、想定ができる。

(土師器)

暗文杯332は、底部が黒色を呈する以外は、赤橙色を呈する。胎土はきわめて良好で外面は底部も含めて丁寧なヘラ磨きで仕上げられている。内面にみられる暗文は、底部に三重の螺旋が施こされ、器壁には二段の放射文が描かれる。両放射文間は、サイクロイド状の暗文で区画されている。南山浦古墳群で出土した暗文杯のなかでは、優品である。甕328、329はともに美道部から出土したもので、調整、胎土、焼成は同一である。ただし、328が若干長胴であるなど微妙に喰違っている部分もある。これらは、破壊されており閉塞石下にあった。杯333は、前記甕の細片とともに出土した。高杯330、331は左袖部で他の須恵器に混って出土した。ともに丸味をおび大きく開いた杯部をもち、接地面を大きくするために、脚先端を水平にひろげる。杯部は同径だが、脚部は330がやや長い。

床面敷石下から出土した土師器が334～343である。須恵器はみられなかった。例外なく細片となっていたので、復元がむずかしかった。杯もしくは甕334～339は、径が近い数値を示し、

分厚い口縁をもつなど、焼成、胎土、調整等に共通点を焼つかあげられるが、その細部は様々である。340、343は、ともに直立した口縁をもつ、同形の壺である。長頸化した胴部をもつと推定できる。342は甕口縁部で、343は、その把手であろう。334～341は胎土焼成が類似するが、342、343は、胎土焼成は異なる。

(装身具)

銀環393は、風化により著しくもろくなっている。厚さが0.5mmにもみえないもので、内部は空洞となっている。径4cm余の環状を呈すると考えられるが、詳細は不明。いま一つの銀環391は、番線状の銀を丸く曲げたもので、善通寺市王墓山古墳に類例を見い出せる。指輪かも知れない、両者は酸化銀特有の黒色を呈している。耳環392は、一個のみである。9・10号墳例より細く大きい。これらの装身具は玄室中程で発見された。

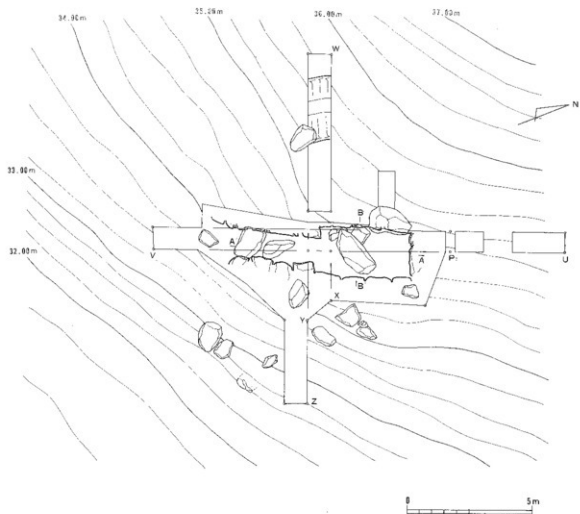
(鉄器)

馬具が注目される。鎧二点430・431と轡二点429、417～423がある。その他415、416、424～428も馬具の部品と考えられる。430、431は玄室中程右寄りに、ほぼ平行に置かれていたものでともに三連の兵庫鎖で、絞具で釣る構造のものである。429は玄室右奥出土のもので、錆化により鉄塊となっていた。図は机上で復元したものである。417～423は、玄室中程の左寄りに検出されたもので、破損が著しい。両者は鏡板の様式が相違する。鉄鍔は大型品398～401と、小型品395～397がある。小型のものは長い茎をもつ。鍔394は玄室左側壁中程で検出された。鍛造品で中央部と先端を欠損する。着装部は、やや歪む。後の変形であろう。刀子402、403も出土している。464は、鉄板を丸くおりまげて着柄部をつくりだしている。417～423と、同じ地点で一括出土した。棺釘405～410も幾つか出土している。411は、完形品で短かく横幅の広い身部をもつ。小型のクサビであろうか、412～414は用途不明の鉄器で、釘状の部分と頭の部分からなる。414は、厚さ2mmの円盤状の座金が錆付いていた。頭部、座金の表面には、金箔が確認される。馬具帯の飾り金具か、もしくは棺金具であろう。

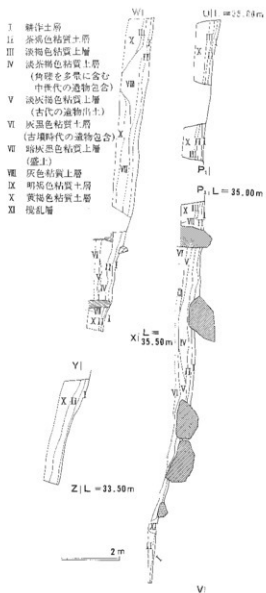
古墳の築造については出土品から、6世紀末から7世紀初頭と考えておく。詳細にみれば、この時期に二度以上の埋葬が確認できる可能性が高い。いずれにしても、今回調査した古墳のなかで、最古の築造と考えられる。しかも、墳丘石室の規模、副葬品など、他の古墳の追従を許さないものがある。南山浦古墳群を形成した集団のなかでは、最も有力な家族が、いち早く横穴式石室を墓制として取り入れたのであろう。なお、7世紀後半の追葬が行われている。南山浦古墳群では、最も新しい埋葬の一つである。

(その他)

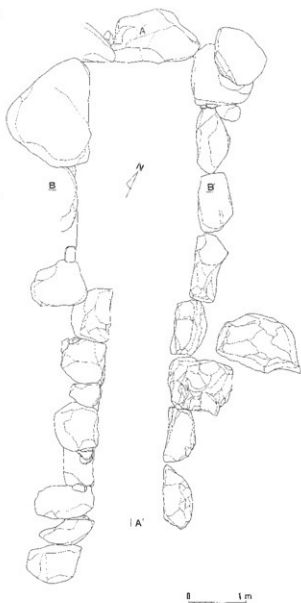
弥生土器344～348が墳丘より出土している。344～346は壺、347、348は高杯で凹線文の盛行する弥生中期後半の上器と考えられる。10号墳例と同じく運搬されたものである。なお、10号



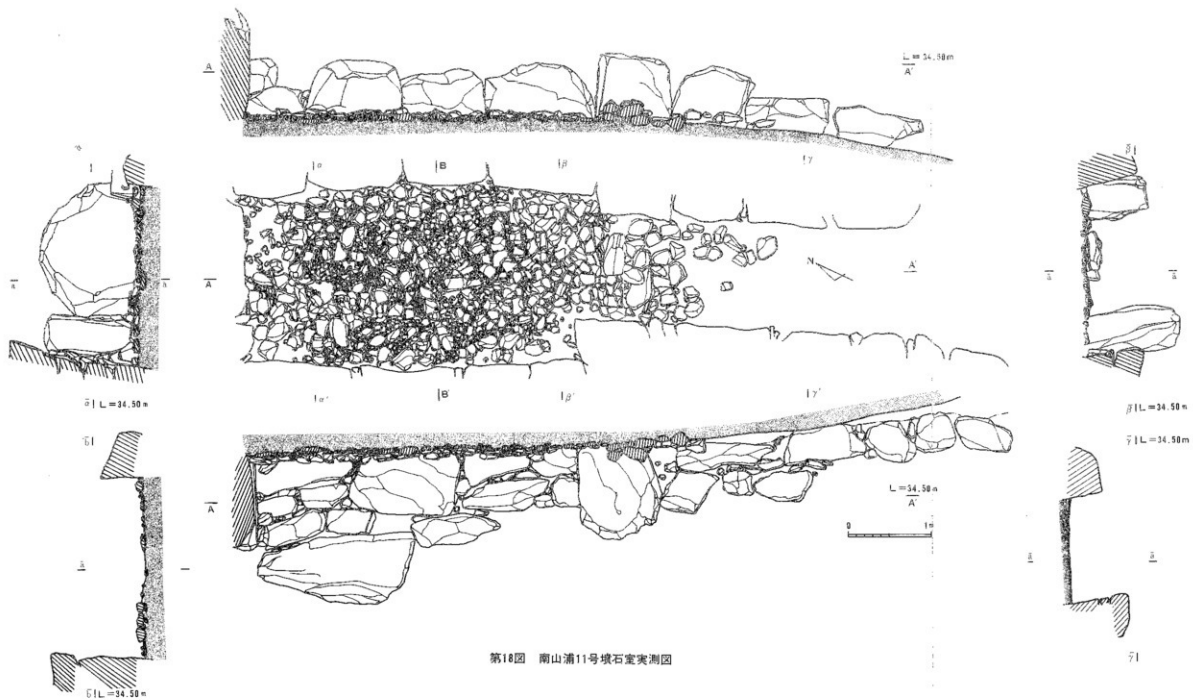
第15图 南山浦11号墳地形測量図

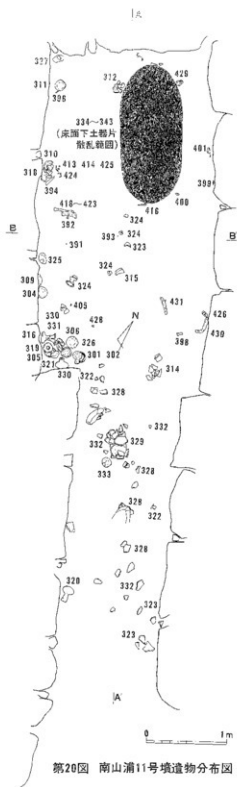
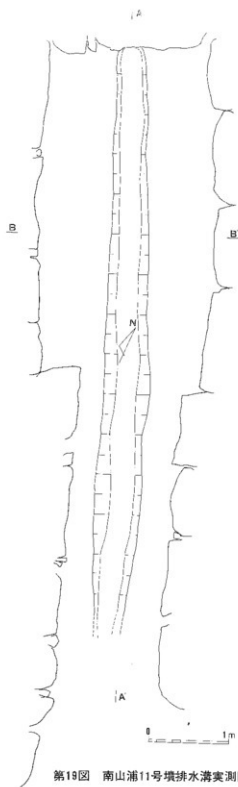


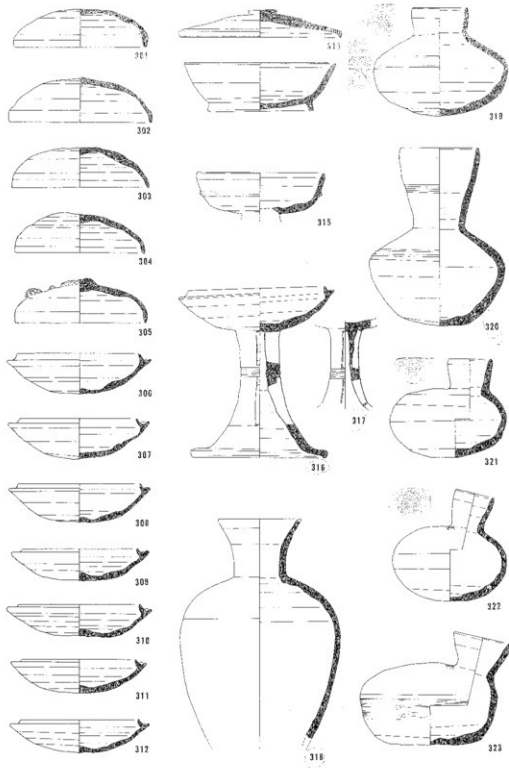
第16図 南山浦11号墳土層図



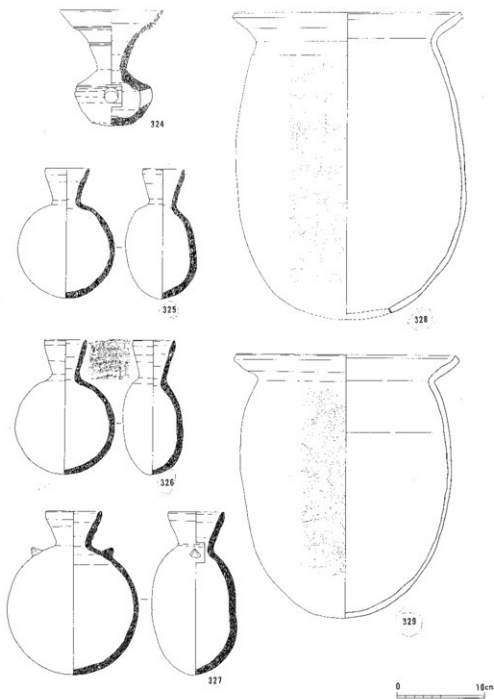
第17図 南山浦11号墳石室上面図



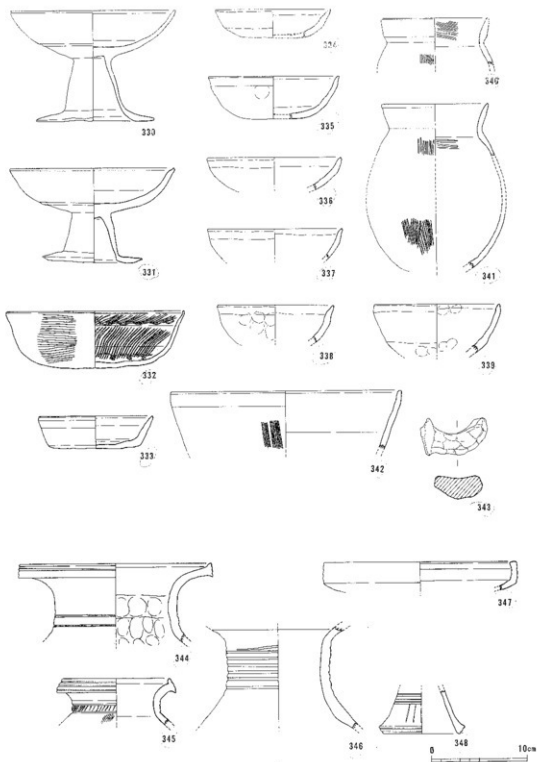




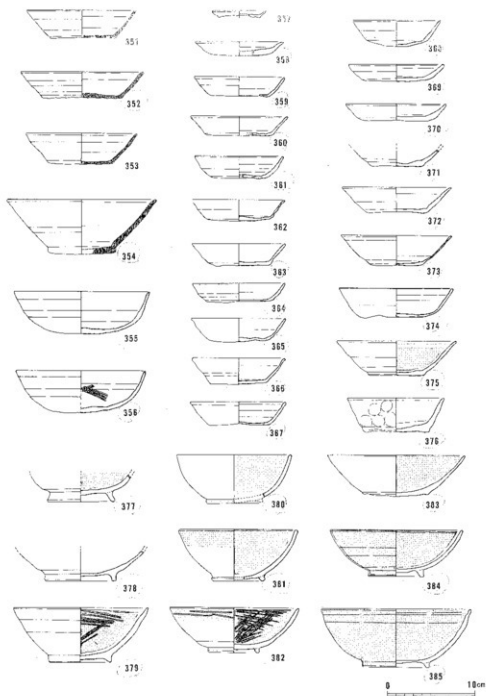
第21图 南山浦11号坑遗物实测图(1)



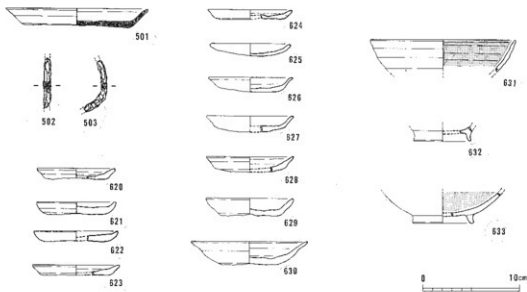
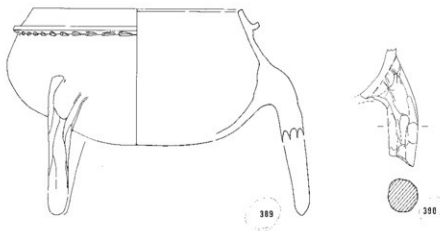
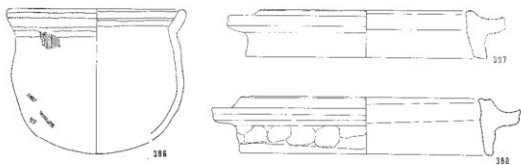
第22图 南山浦11号墳遺物実測図(II)



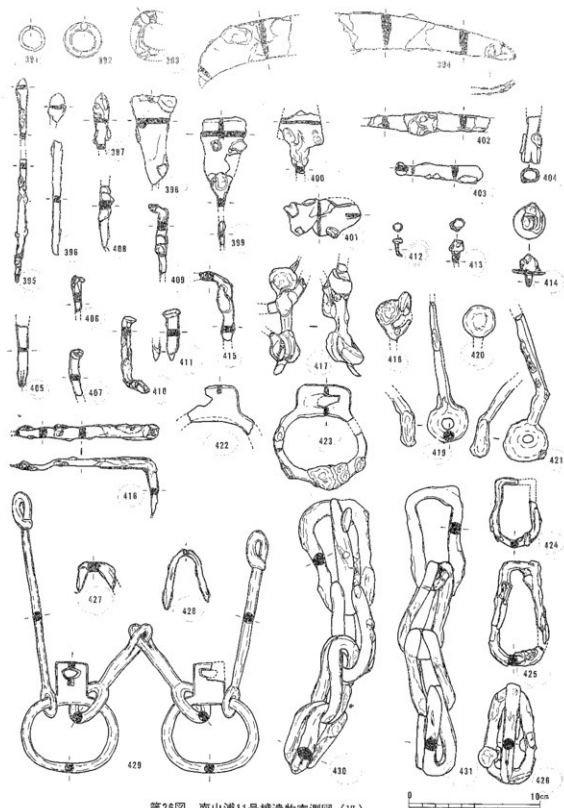
第23图 南山浦11号墳遺物実測図(Ⅲ)



第24图 南山浦11号墳遺物実測図 (IV)



第25图 南山浦11号坟他遗物实测图(V)



第26图 南山浦11号墳遺物実測図(VI)

墳と同じく同地点で集中的に出土しているので、各々、同時期の一括資料としての扱いが可能である。

再利用時の土器の出土例は多い。須恵器杯352～353、同埴354、土師器皿355、356同小皿、杯357～376同埴377～385（内面黒色土器377～383、黒色土器384、385、）甕386、不明土器387、388、甕389、390をあげておいた。古代末と目される須恵器杯や甕などから12世紀代と考えられる389まで、不連続な長期間の再利用が考えられる。なお、389は第IV層出土であり、土師器小皿の多くは第V層上面、それ以外の多くは第V層下面の出土である。おそらく、10～12世紀代まで何度か、住居等として横穴式石室が利用されたのであろう。輸入陶磁は、全く存在しなかった。

Ⅲ-4 南山浦12号墳

墳丘

南東方向60mに所在する13号墳とともに、南山浦古墳群分布範囲の北限に位置する。北側には、浸食が著しく山肌に取り込んだ流水路が等高線に直交して走る。この小谷は、土地境界も兼ねており、北の畑地は調査対象外である。

古墳の存在する周辺は、緩やかな傾斜面で横穴式石室の用材と考えられる大型の安山岩が数個散乱していた。

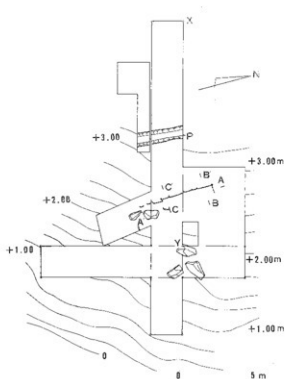
墳丘は、地表観察はもちろん、発掘調査でも確認できない程で全く存在していなかった。ただし、上方に設定したトレンチで、周溝の可能性のある溝状の遺構が確認されている。

石室

横穴式石室は、墳丘同様ほとんど残っていない。山側にあたる西側壁の基底石が残存するのみである。石列は、総延長4.8mで、上部、下部ともにほぼラインが通る。北から6石目の方柱状の石材が、側壁面よりやや突出気味であり、袖石とも考えられる。また、鏡石は抜き取られていたが、その抜き取り穴と5個の20～40cm大の根石が確認できた。これから、全長3.1m余の玄室が考えられる。

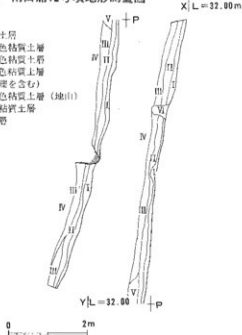
床面は、玄室の西側奥のみ観察できた。径10cm前後の円礫からなる礫床ともいうべき床面で、その下部には扁平な安山岩が敷かれていた。精査すると、礫数は0.5×1mの範囲にみられるのみで、その外側には残存部が僅かではあるが石数だけで礫がみられない部分がある。東側は、流出したものと解されるが、南側で確認した安山岩の敷石は、後述する13号墳の棺床と扁平な石材による床面との関係に共通する。ただし、13号墳は、石室と棺床主軸が一致する。本墳でも同様とすると、全長1m余の棺床となる。そのような短軸の棺床を想定するより、石室軸に直交したものを想定する方が妥当ではある。この場合、玄室奥幅は、1.5m余となる。

再利用と考えられる土器が出土しているところから、ある程度の規模をもった横穴式石室との

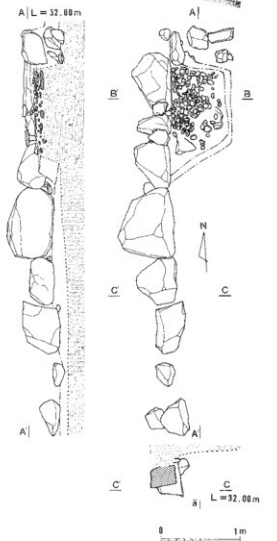


第27图 南山浦12号墳地形測量図

- I 耕作土層
- II 茶褐色粘質土層
- III 淡褐色粘質土層
- III' 淡褐色粘質土層
(角礫を含む)
- IV 黄褐色粘質土層 (地石)
- V 灰色粘質土層
- VI 攪乱層



第28图 南山浦12号墳土層図



第29图 南山浦12号墳石室実測図

推測はつく。

石室の構築は、地山をカットし、その面に基礎石をその後地山土をたたくしめて原床面を形成したと考えたい。石室の用材は、円礫を除いて全ては安山岩である。

遺物

遺物の絶対量は、極めて少ない。確実に、古墳時代のもと考えられる遺物は皆無である。埋土中より(501~503)の遺物を得ている。須恵器501は、古墳時代以降のもので、本墳は再利用された可能性がある。

Ⅲ—5 南山浦13号墳

墳丘

調査対象地区の北東隅に設定したトレンチによって、周溝、墳丘、石室が検出された。コンタラインの間隔が広がった標高36m余に位置し、北方には、12号墳脇にみられた境界の溝が走り、下方は住宅のため大きく削平されている。

周溝は、部分的な調査に留まったが、石室の北西部で確認した。調査した総延長は7.5m、深さ0.4~0.8m、幅1~2mの、比較的浅いもので、石室付近を中心として弧を描く。また、石室の左手全面では周溝は、検出できなかったが、代わって落ち込みが確認できた。

墳丘は、他の古墳と同様、蔽きしめた暗灰黒色粘質土層で築かれていた。他の古墳との顕著な相違点は、石室の北西側でみられた残存墳丘上面の葺石状の配石である。10~40cm余の安山岩塊石が、乱雑に置かれており“葺く”“貼る”のいずれともいえない、不規則な配石である。配石は、墳丘の一部分にしかみられず、石室の南半分にはもともと存在しなかったのか、開墾、流出等により消失したのか、不明である。ただし、後述するように石材を付近から多量に取った事実がある。また、ほとんどの塊石は上部を欠いた石室の現存上面よりほぼ同じもしくは、低レベルに位置する。天井石や、それを覆う盛土の存在を考えると配石上には、さらに盛土があったと考えられる。とすれば、配石より下方の盛土が現存することからして、流出を防ぐための一手法とも思える。こうした後期古墳における、墳丘の配石は、板出市真伏古墳にもみられる。同古墳では、積石塚古墳の系譜をひく可能性を指摘されている。しかし、本古墳は石清尾山古墳群中類例のない事例であるとともに、墳丘内配石でもある等から、時間差のある積石塚古墳と、結びつかないとするのが、現状では妥当であろう。

残存した墳丘と周溝等から推定すると、南山浦13号墳は、径9mの円墳で、残存高0.8mである。

現状では周溝の検出面が現地表面より0.8m余をはかるなど、墳丘が流れ出すのに変わって、上方の土砂が堆積し、墳丘を地表から消し去ったのである。

石室

横穴式石室は、群中で最も小規模なもので、N-12.5°-Wを走る主軸は、等高線に斜交している。石室のそれぞれの計測値は次のとおりである。石室長4.75m、玄室長2.6m、玄室幅一奥壁部1.0m、中央部1.3m、玄門部1.2m、羨道長2.15m、羨道幅一玄門部1.0m、先端部1.1m、現存高一玄室部0.75m、玄門部0.75m、羨道部0.8m。

安山岩の石材を用いて構築されている横穴式石室全体は、上部が失われている。開壙時の消失のほか、土地所有者が、住宅の建設のためかなり多量の石材を付近から採集したことがあり、そのときに破壊されたものと思われる。それでも、群中で最も保存状態の良い石室である。

玄室奥壁には、一枚の鏡石が使用されている。ただし石材自体の個性によるためか、奥壁プランは主軸に斜交している。従って鏡石を挟む様に置かれた両側壁のうち、東側壁が長く、玄室右奥が切れ込んだ状況を示す。袖部に台付壺が置かれたり、小規模な石室であることも考慮すると、10cm余の袖部が確認できる。玄室側壁は東側が顕著であるがともに割張りを示す。これらより、両袖式の石室と考えておく。

両側壁は、ともに2段から3段残っているが、他の古墳同様、山側西側壁が保存状態が良い。基底石はいずれも5石で、他の側壁石材と余り相違ない。基底石使用法についても、横に使う例が多く9号墳の例にみるほど、両側壁で顕著な差はない。小型石室の上部は、重量がないからであろうか。

側壁は、各段のラインが通っているのを観察できる。特に東壁が顕著で、西側では、二段目の部分でやや乱れる。両三段目は内側にせりだした持送り技法が採用されている。

袖石は先述したとおり、ともに壁面より10cm余突出する。両袖石は、ほぼ同じ高さを測る。これに縮石を置いたのであろうか。とすれば、現存高は玄門高に一致する。

羨道側壁は、東側で横に使用した一個の基底石が残るのみである。それに対して西側では顕著な差がみられる。比較的大型の石材が2個、袖石に連続して面を揃えて立ち並べられる。

さらに先端には小ぶりの石材が、やや外側にみられる。従って、西羨道部は、主軸に対し、わずかに開き気味となる。こうした構築法の羨道は、10号墳にその例をみる。

玄室床面には、扁平に近い20cm大の塊石を、すきまなく一部重ねあわせながら敷きつめている。ただし、最奥部には敷石の施設はみられない。

注目されるのは、棺床の存在である。敷石上に、径3～5cm余の小粒な円礫を敷いたもので、西壁にそって主軸に平行に設けられている。棺床設置前に四隅、長辺の中程の六ヶ所に、敷石面より数cm高く塊石を置く。その範囲内（長さ1.6m幅0.65m）に円礫を厚さ2～3cmで敷きつめる。ただし壁面に密着した長辺以外では、円礫が範囲外に落ち観察によれば先記の範囲より少々広く感じる。棺床は県教育委員会の調査した古墳にもみられ、県内で南山前古墳群に多

く発見される特異な施設である。

礎石は、認められず、床面敷石も、玄門あたり迄で、羨道まではのびないようである。さらに羨道中盤には、床石と同様な石材を用いた閉塞石がみられた。また、排水溝は箱蓋によっても未確認である。当初から存在しなかったのであろう。

石室の構築については、他の古墳と大差ない。

遺物

須恵器8点、土師器4点が、横穴式石室内より出土した。また、周溝底より須恵器1点を得ている。

(須恵器)

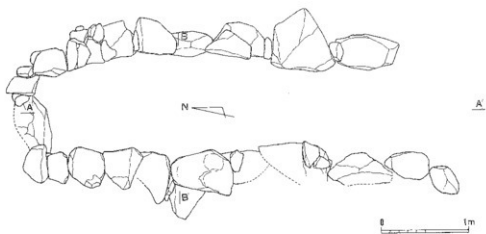
杯身は3点、杯蓋は2点を数える。603は、羨道部で検出した小型の高台付杯である。ただし、606と同じく浮いた状態で出土したため、9号墳伴出遺物の確証はない。605は、閉塞石中に左側壁に立てかけたように置かれていた。深い杯で、断面く字状の高台を貼付けている。この杯とセットをなす杯蓋604が隣接して発見された。その宝珠は扁平化し、中心の周辺が、やや凹む。601は602とともに611に載せられた須恵器杯蓋と杯身である。左側壁基底石のうち、玄門から1石2石めの隙間に置かれていた。602の底部が、ヘラ削りによって平らに整形されているので、602を杯身と考えておきたい。601と602は逆に置かれていた。右袖部には、台付口壺609が、完形で検出できた。右袖周辺には、それ以外に4点の土器が検出された。607、608の平瓶がそれで、両者は法量、調整、焼成等が同一である。肩部の稜は判然としない。608に接して、後述する土師器暗文杯が二個体置かれていた。周溝から出土した須恵器601は、生焼きともいえる焼成で、周溝底部に破片となって、一括で検出された。調査範囲の溝では、本例以外に遺物は皆無であった。

(土師器)

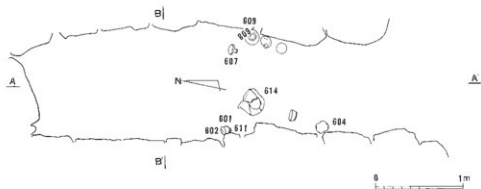
暗文杯は、2個体ある。前述608に接して、612と613が裏返えしに置かれていた。内面底部の螺旋はくずれ、放射線は左巻きに描かれるなど、他の暗文杯にみられない事例である。611は、小型の暗文杯に脚を取り付けたもので、小型暗文高杯と呼んだ。螺旋は消滅し、2段に放射線が施文されている。脚外面にも正面部分に限って暗文を施している。601、602の順で上に、須恵器杯セットをのせていた。これらの暗文杯には、在地的ともいえる独自の発想がうかがえる。614は、甕である。口縁端部に相違点はあるが、石清尾山13号墳に例がある。なお、甕は第Ⅱ層中に発見されたので、古墳に相伴すると確定できない。

(鉄器ほか)

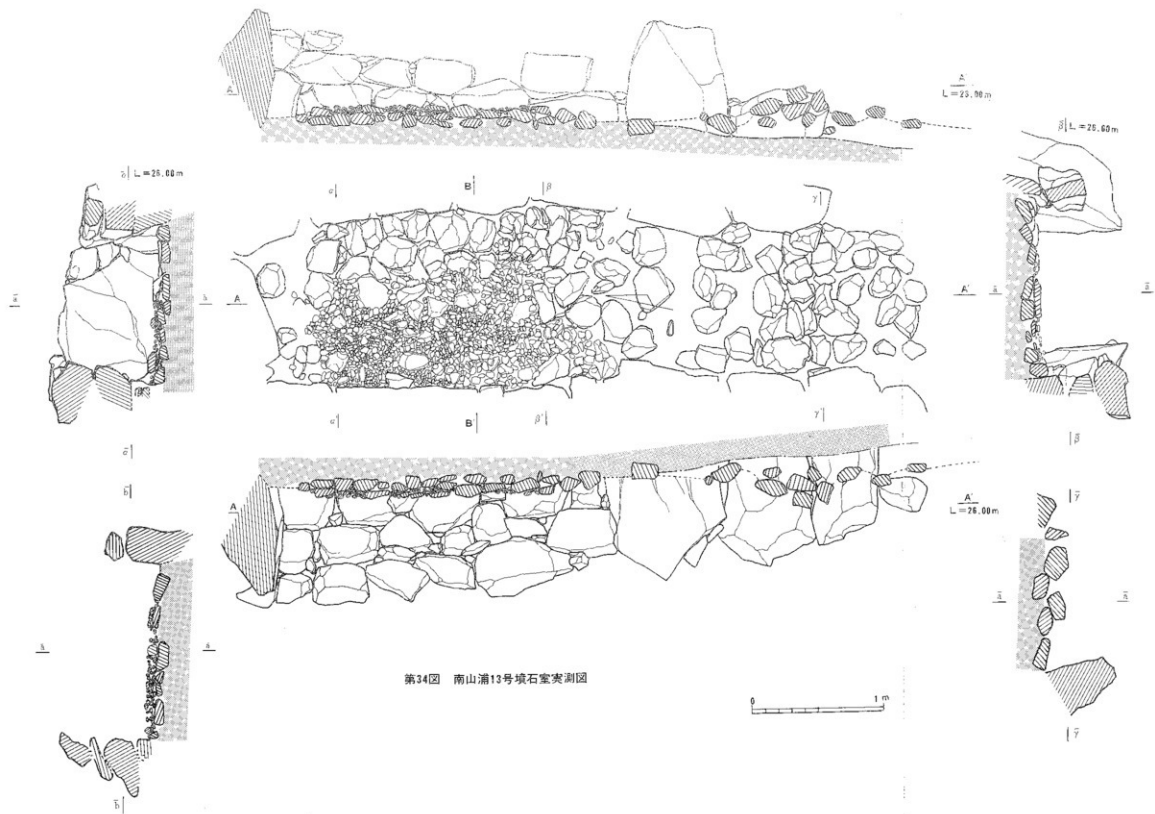
4点(615～618)検出された。いずれも羨道部からで、全て釘である。棺釘と考えられよう。石室が小型なるため、羨道に追葬が行われたのであろう。



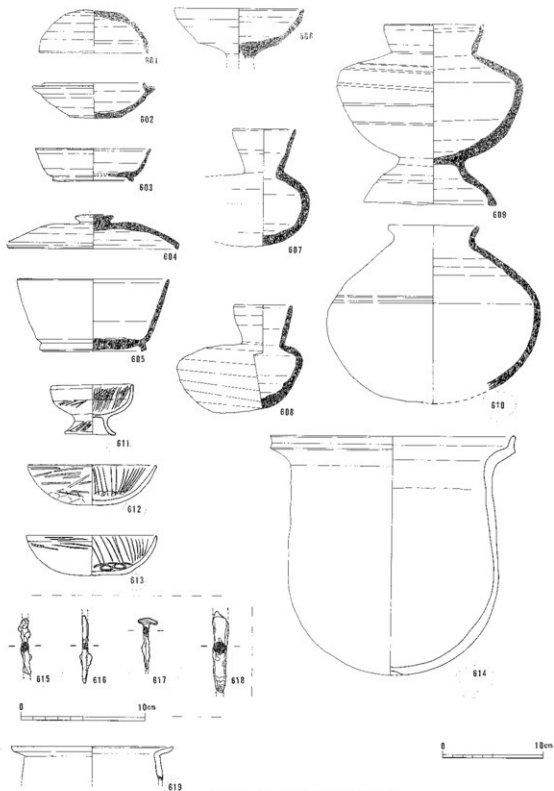
第32图 南山浦13号墳石室上面图



第33图 南山浦13号墳遺物分布图



第34图 南山浦13号坑石室平面图



第35图 南山浦13号墳遺物実測図

棺床からは、釘をはじめ一点の遺物も得られなかった。土器の出土状況からして、保存状況の良い石室と考えられるので、当初から、棺床周辺に鉄器類が置かれなかったであろう。

石室の小型化、棺床の存在。副葬品の簡素化、暗文杯の独自性等、新しい要素が多く見られる。築造時期は、7世紀中頃と推定できるが、10号墳より後出すると思われる。最後の埋葬が行われたのは、7世紀後半と考えておく。

619は、弥生土器甕の口縁部である。石室床面を除いたときに出土した。10、11号墳と同じく持ち込まれたのであろう。文様がないことから、やや後出するものと思われる。

620～633は、石室の北で出土した中世の土器である。11号墳石室内出土と比べ、土師器小皿の器高が著しく小さくなることである。特に、620～624は、退化ともいえるほどで、もはや皿の役目は果たしていない。こうした事例は、9号墳にもみられる。

第IV章 まとめ

南山浦古墳群で調査された古墳は全て、横穴式石室を主体部に採用した古墳である。いずれも、古墳時代後期後半に属し、各地にみられる同時期の群集墳と何等変わりがない。

ただし、今回調査の5基のうち、調査前に墳丘が確認されたのは、11号墳1基に過ぎない。特に9、13号墳では、石材のごく一部が当初の観察で確認されたのみで、土地所有者の証言がなければ古墳とは考えられなかったほどである。現に、昭和45、46年度にわたって高松市教育委員会が実施した石清尾山塊の古墳分布調査では、7号墳から13号墳までが記録されていない。斜面に構築されたため、流出など自然作用によって墳丘が失われたと考えられるが、何よりも、開墾によるためであろう。

先述したように南山浦古墳群は、横穴式石室墳で構成された一般的な群集墳である。そうしたなかで、特に注目されるのが、土師器暗文杯の出土である。県内では、坂出市の鶴ヶ峰西南尾根古墳で二個体、高松市久本古墳で一個体知られるに過ぎない。稀ともいえる遺物が、調査した古墳のうち、12号墳を除く4基から出土している。(105、210、211、332、611~613) それらは、611を除くと全て羨道・玄門からの出土である。11号墳では、一個体分の破片が散乱し、10、13号墳では、袖石の脇一玄門部分に二個体の暗文杯が裏返しにして置かれていた。出土状況からして、玄室内に持ち込んだ形跡が認められないことや、11号墳では、破砕されていることを考え合せば、各古墳で埋葬後の祭祀が行なわれ、暗文杯が利用された可能性が高い。最後には、玄門部分で埋葬後の祭祀が執り行われるようになり、使用した土器を破砕することも無くなったのであろう。さらに、13号墳で埋葬前に供献されていた小型暗文高杯の存在を考え合せば11、10、13号墳各々で暗文杯を用いた祭祀が進化、もしくは変化したと考えられる。

いずれにしても、南山浦古墳群では埋葬後の葬送儀礼が、執り行われ、その際、暗文杯は非常に重要な位置を占めていたらしい。県内で発掘された数多くの横穴式石室墳と比べ、特異な存在といえる。しかも、群全体の性格として扱えられることは、南山浦古墳群を形成した集団がもつ個性的な葬送儀礼と言える。

土器——主に土師器を用いた祭祀は他にも確認できる。埋葬後の祭祀には11号墳にみられた破砕された土師器壺二個体もあげられる。しかし、最も、目立つのが、埋葬前の祭礼で、9、11、13号墳にみられる。9号墳では、土師器杯が、玄室左隅に一個休置かれていた。このような出土状況を示す土師器は、器種が異なるもの高松市鬼無古墳群(南山浦古墳群西方3.7km)中の、古宮権現古墳や平木1号墳に確認できる。先行する前者では、三個の土器が積み重ねられ、丁

寧な扱いがなされている。平木1号墳では壺1点が置かれていたのみである。9号墳の場合、土器が置かれていた可能性はあるが、平木1号墳例に近いが、より簡素化された事例としておきたい。3基の土器出土状況は床面敷石より低レベルで床面形成前に玄室左奥隅に置かれている。埋葬前の祭祀の一例で、鬼無古墳群にみられるように範圍を越えて他の古墳群と共通した祭礼の存在がうかがえる。

11号墳では玄室床面を除いた後、多くの土師器破片が、中央付近一面に薄く敷きつめられた状況で検出できた。時間的制約のため、復元では完形にはならなかったが、坏あるいは埴6点394~339壺2点340・341瓶1点342・343の計9個体の存在が確認できた。甗を除き胎土、焼成が同一か、類似する。玄室床面の水ハケ用とも考えられるが、排水溝にはほとんど土器片が混入していなかったこと、玄室床面全体に及ばず、羨道にはみられないこと、胎土、焼成の一致などから、同時に製作し床面設置前の祭祀に使用した土器を、故意に砕いたのであろう。埋葬前祭祀の一形態といえる。管見による限りは、県内の横穴式石室墳にその様な事例はない。

13号墳でも、床面形成前の祭祀に伴う土器が確認されている。左側壁基底石のすき間に検出された土師器の小型暗文高坏と、その上の須恵器坏蓋と坏身である。須恵器は身と蓋が逆になっている。葬送のため、逆に使用されたのであろう。三点の土器は床石で隠されている。

9、11、13号墳には床面形成前の祭祀が、各々違いはあるものの存在していた。横穴式石室構築にあたって、床面形成が重要な節目の一つと考えられていたのであろう。

須恵器についても、問題点が多い。例えば、11号墳における須恵器は、焼成、胎土等で二群以上に分割できる。窯記号等で共通性を見出せた、平瓶321、直口壺319、提瓶326ほかの一群と、提瓶327、無蓋高坏315、坏身301、302、坏蓋308、306の一群である。後者は製作を急いだためか、焼成が甘い。これらは、一回の埋葬にあたって至急に製作されたものと解される。従ってこれらから、主たる埋葬は二度以上行われたと推定される。これは馬具が二組副葬されていたことを考え合せれば、さらに確度が高くなる。副葬された須恵器は儀器なのである。そのためか、本来なら棄却すべき、不良品一窯壁付着の坏蓋305まで納められている。

石室について考察してみる。完存例はなく全て基底石しか遺存していない。なかには10、12号墳のように、東側壁が除かれていた古墳もあった。これらは早い時期の再利用、徹底した開墾などによるものと思われる。

横穴式石室の規模は、全体的に余り大きくなく、9、11号墳が4m級の玄室を持つに過ぎない。石清尾山古墳群では磐鉢谷に所在する石清尾山4号墳の、5m足らずの玄室が最大とされるが、9、11号墳はひとまわり小さいだけで遜色もない。石清尾山4号墳等の遺物は失なわれているため比べるよしもないが、11号墳の遺物の質と量は、石清尾山塊で調査された横穴式石室墳のなかでは群を抜く。

石室主軸は、5基のうちだ一基9号墳のみが、斜面に平行に構築されている。しかも、9号墳の石室は、細長く奥壁石室幅が狭くなる形式で、鬼無古墳群中の支那平木古墳群に類例を見い出せる。先述したように、土師器を使用した遊郭前の葬送儀礼に共通項を確認できる。ところで他の四基のうち、11号墳は、袖石の縦の喰違いを無視すれば、石室が胴張りを有する点袖石が羨道壁面に対して突出しない等に、石清尾山2～4号墳に共通性を見い出せる。しかも框石がなく床敷石が羨道中程にまでのびる形式は、石清尾山2号墳にのみ認められる。羨道途中まで敷石を施す形式は9号墳にもみられるが、この場合框石は隙敷下に設けられている。

従って11号墳は、石清尾山2号墳との強い関係を確認できる。これを汎石清尾の石室の一種式とすれば、9号墳は汎石清尾の性格を一部に有しながらも、他の影響をうけている部分も多いと考えられる。鬼無古墳群をはじめ西方の影響下に成立したのが、9号墳であろう。ただし、床石の状況、暗文坏の出土、何よりも南山浦古墳群に属するなど、古墳群を形成した集団からは、完全に脱却していないともいえる。

ところで、11号墳の羨道西壁は、玄室主軸に対して僅かではあるが、山側に曲がるように観察できる。長い羨道のため、先端が極端に下ることを避け床レベルを保つ意味があると考えた。このように、羨道がやや開き気味の事例は、10・13号墳の小型横穴式石室にも認められる。しかも、両者では羨道壁を袖石のように、大型石材を立てて使用している。暗文坏を裏返しに二個用いた儀礼も10、13号墳の共通項として抽出できる。従って、10、13号墳を1グループとしてとらえられるであろう。さらに開き気味の羨道から、11号墳の影響下に出現したといえる。10号墳と11号墳が近接し、13号墳も極端に離れてないことを考慮すれば、仮説として3基を1グループと提案する。さらに12号墳も位置関係から同グループの可能性大と思われる。多少の危険性はあるが、9号墳を別グループと考えておく。さらに前者は、時間的に直列に並ぶのではなく、傍系も含まれていると考えられよう。さらに、仮説に沿ってすすめれば、石室の大型化から小型化を考えて、11号墳と10号墳、12号墳と13号墳の結びつきが想定される。もちろん、11号墳の系譜がやや先行するといえる。

なお、13号墳の棺床は、県内で余り例をみないもので、他地域からの導入が考えられよう。

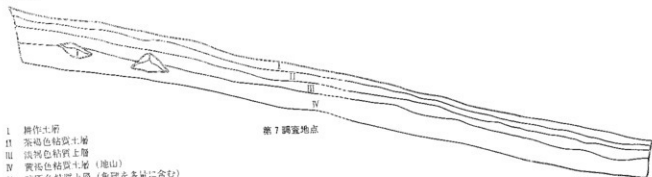
以上から南山浦古墳群形成の動向を推定すると、6世紀末から7世紀初頭にかけて、11号墳が出現する。これは汎石清尾の性格を有すると考えられる。石清尾山の他地域にも、同じように先駆をなす横穴式石室墳が前後して築かれていたらしい。11号墳は、二セット以上の馬具、特異な銀環、金銅製の飾り金具等の副葬品、特異な埋葬前後の祭礼等から有力な家族の墓といえる。その後、12号墳が出現する。おそらく11号墳の傍系であろう。続いて、10号墳が11号墳の直系として出現するが、前後して9号墳も構築されたようである。石室規模からいえば、11号墳に匹敵するこの古墳は、10号墳と影響しあいつながら、他地域の勢力と結びつくことで、

突然に有力となった家族の墳墓と考えられる。この時点で、11号墳の系列を波瀾していることも十分考えられる。13号墳は、やや遅れて豊後に出張するようである。ただし、10号墳とそれほど時間差はなく、むしろ連続性を指摘できる。12号墳は、棺床等の存在から、11号墳の系列の勢力が独自の発展を示した結果であろうか。3、7号墳も直系と考えることもできる。なお、10、11、13号墳には高台付杯の存在等から7世紀後半にまで降る時期の追葬が想定できる。高台付杯のように後出する須恵器の副葬は、前山1号墳、勝負谷古墳（長尾町、三木町）と、東方に類列が多い。

弥生土器が墳丘盛土より出土しているが、これらは先述したように、盛土に混入されていたものである。近くに弥生時代の集落が存在していることは疑いない。県教育委員会の調査でも、弥生土器の出土が伝えられている。近傍に大規模な遺跡が未発見のまま眠っているのであろう。なお、10、11号墳で出土した弥生土器は、中期後半に属すると考えられる。しかも、地点を同じくして集中的に出土しているところから、二次的な資料とはいえ、一括資料として取り扱うことも可能である。

再利用の土器も多く出土している。特に11号墳が圧倒的で9号墳がこれに次ぐ。13号墳脇の包含層からの出土もある。特に、石室からの検出は、大型古墳に限られている。10世紀に始まった再利用は、12世紀に終焉をむかえる。この間、両古墳は2度ないし3度、住居あるいはそれに類似した施設として利用されたい。出土土器については、さらに詳細に考察を加えるべきであるが、時間的制約のため、今後の機会に譲りたい。

I¹
L = 39.00m



第7調査地点

- I 黒褐色土層
- II 紫褐色粘質土層
- III 灰褐色粘質土層
- IV 黄褐色粘質土層 (池山)
- V 緑灰色粘質土層 (角礫土多量に含む)
- VI 埋瓦層

I¹
L = 42.60m

J¹
L = 38.06m



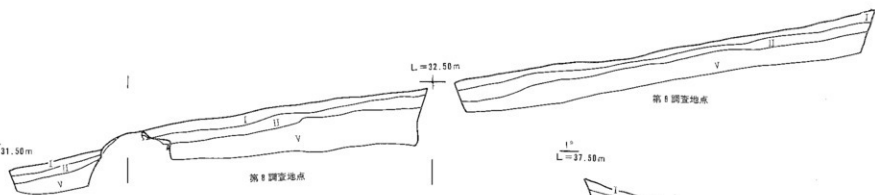
第6調査地点

J²
L = 41.80m

I¹
L = 32.00m

L = 32.50m

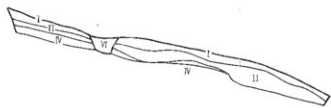
J¹
L = 31.50m



第8調査地点

第8調査地点

I¹
L = 37.50m

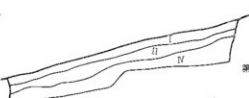


第9調査地点

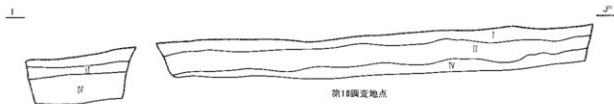
J¹
L = 39.00m



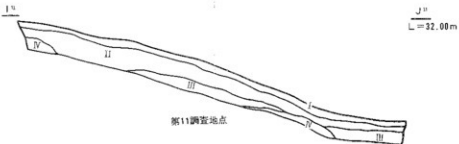
K¹
L = 35.00m



第8調査地点一部トレンチ調査図



第10調査地点



第11調査地点

第36図 各調査地点土層図 (第4図参考)

9号墳 須恵器・土師器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A B	口 径 高さ	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
101	玄室中央床面	須恵器 杯蓋	A 9.0cm B (2.5)cm		良	青灰色	普通	小型、内外面回転ナデ	
102	玄室	グラス 状	A 12.1cm B (3.9)cm		砂粒を多く含む	明青色	普通	口縁端部は丸くおさめる。土器片下部に1条の凹線。内外面回転ナデ。	
103	玄室中央床面	脚部	脚部径11.0cm B (2.8)cm		大粒の砂粒を多く含む	明青灰色	普通	上部に1条の凹線、内外面に回転ナデ。	
104	玄室左奥隅	土師器 杯	A 11.7cm B 4.1cm		砂粒を多く含む。	内外面赤色十一部 黒色	不良	体部より外反気味に立ち上がり端部は尖りぎみになる。底部は丸みをもつ平底である。磨耗しており、細部調整不明。	
105	羨道	暗文杯	B (4.4)cm 残存長		極めて良	赤褐色	良	内面体部に右まわりの放射状略文。やや磨耗。	

101~103須恵器、104~105土師器

10号墳 須恵器・土師器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A B	口 径 高さ	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
201	羨道脇表採	杯	A 13.0cm B 3.6cm		1~2mmの砂粒を含む密	内外面青灰色	良好	立ち上がりは、短く内傾する。受部基端は、やや上向きになる。受部より底部にかけて丸みがあり、底部はへら削り後の調整が確である。内外面 回転ナデ調整	
202	羨道	高杯 (無蓋)	A 9.6cm B 8.6cm		1~2mmの砂粒を含む密	内外面灰色	良好	口縁は、外上に直線的にのび端部は丸くおさめる。脚部は、ラップ状になり、中間に2条のへら凹線を施す。内外面 ヨコナデ調整	自然稚あり小型品
203	玄室	高杯 杯部	A 11.7cm B (3.2)cm		良	灰色	普通	器壁の厚み均一でやや薄い。口縁端部は丸くおさめる。内外面回転ナデ。内面自然釉付着。	204とセット?
204	"	高杯 脚部	脚部径9.2cm B (4.7)cm		良	黄灰色	普通	脚部中央上方に2条の凹線。内外面回転ナデ。外面自然釉付着	203とセット?
205	"	高杯 (無蓋)	A 10.3cm B (4.0)cm		1~2mmの砂粒を含む密	内外面灰色	良好	口縁は、外上に直線的にのび端部は丸くおさめる。脚部は欠欠、内外面 ヨコナデ調整	小型品
206	玄門	グラス 状	A 10.2cm B (8.5)cm		1~2mmの砂粒を含む密	内外面灰色	良好	体部より口縁部に向かって丸みをおび、直線上に立ち上がり端部は丸くおさめる。体部中央に、細い2本のへら凹線を施す。内外面回転ナデ調整	207脚がつく
207	玄室	高杯脚	脚部径9.2cm B (3)cm		良	外青灰色 内灰白色	普通	脚部中央上方に凹線、内外面に回転ナデ	206とセットか?

遺物番号	出土地	器種	法 A B	高さ 直径	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
208	玄室	平瓶	A6.0cm B11.0cm		大粒の砂粒を含む	明青灰色	普通	肩部に破線をめぐらす。頸部と肩部と肩部中央に接合痕。胴部ヘラケズリ、内外面回転ナデ。	
209	"	白付長頸壺	A6.5cm B18cm		密1~2mmの砂粒を含む	内外面灰色	良好	肩部は、口縁に向かって外反し、肩部は丸くなる。体部の肩が張り気味で、ヘラ凹線を施す。脚部は、ラッパ状に広がりヘラ凹線を施し、裾はやや内湾気味になる。ヨコナデ調整	自然袖がある。脚部に歪みあり
210	玄門	暗文坏	A17.4cm B3.7cm		大粒の砂粒を少し含む	赤褐色	良	器壁の厚さ均一。口縁部やや外傾。内面体部右まわりに放射状の暗文。底部2重の螺旋状暗文。内外面回転ナデ。	
211	"	暗文坏	A19.3cm B4.7cm		極めて良	淡褐色	良	底部より垂直ぎみに直線状に外反して立ちあがり口縁端部はやや内傾する。内面体部右まわりに放射状の暗文は、底部2重の螺旋状暗文。内外面回転ナデ。	

201~209須恵器 210、211土師器

11号墳 須恵器・土師器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A B	高さ 直径	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
301	左袖部	坏蓋	A13.2cm B3.8cm		1~2mmの砂粒を含む	内面白灰色 外面灰白色	普通	天井部は、丸みをもち、ヘラ削り調整。中央は不調整。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。	左回転302と重なっていた
302	左袖部	坏蓋	A14.2cm B4.4cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面灰白色 部外面暗白色	普通	天井部は、やや丸みをもち、ヘラ削り調整。中央は不調整。天井部と口縁部の境界は鋭い線をなす。口縁部は、やや内傾し、端部は丸くおさめる。	左回転306と301と重なっていた
303	玄室および羨道	坏蓋	A13.8cm B4.0cm		1~2mmの砂粒を含む	内面暗灰色 外面青灰色	良好	天井部は、丸みをもち、ヘラ削り調整。中央は不調整。全体的に丸みをもち、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。	左回転
304	玄室左側壁中程	坏蓋	A13.0cm B4.0cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面暗灰色	良好	天井部は、やや丸みをもち、ヘラ削り調整。口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。	左回転309とセット?
305	左袖部	坏蓋	A13.1cm B4.4cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面暗灰色	良好	天井部は、丸みをもち、ヘラ削り調整。中央部は不調整。口縁部は内傾し、端部は丸くおさめる。	左回転天井部窯敷付着

遺物番号	出土地	器種	高さ 口径	口径 高さ	胎土	色調	調試	形態及び手法の特徴	備考
306	左袖部	坏身	A12.2cm B4.0cm	1~2mm の砂粒を 含む	内外面灰 白色	普通	立ち上がりは短く、内傾してのびる。受部は湾曲し、先端が外上方にのび丸くおさめる。体部より底部は丸みをもち底部はヘラ切り調整	右回転 302と セット	
307	左袖部	坏身	A11.8cm B4.0cm	1~2mm の砂粒を 含む	内外面青 灰色	良好	立ち上がりは短く、内傾してのびる。受部は湾曲し、先端が外上方にのび丸くおさめる。体部より底部は丸みをもち底部はヘラ切り調整	左回転	
308	左袖部	坏身	A12.4cm B3.9cm	1~2mm の砂粒を 含む	内外面灰 白色	普通	立ち上がりは短く、内傾してのびる。受部は湾曲し、先端が外上方にのび丸くおさめる。体部より底部は丸みをもち底部はヘラ切り調整	左回転	
309	玄室左側 壁中程	坏身	A11.4cm B3.1cm	1~2mm の砂粒を 含む	内外面青 灰色	良好	立ち上がりは短く、内傾してのび、先端は尖り気味になる。底部は、ほぼ平らである。	左回転 304と セット?	
310	玄室左側 壁中程 表道	坏身	A12.2cm B3.2cm	1~2mm の砂粒を 含む	内面淡灰 色外面淡 灰色	良好	立ち上がりは短く、内傾してのび先端は尖る。受部は湾曲し、先端が外上方にのび丸くなる。底部は、平ら気味でヘラ切り調整	左回転 自然釉が みられ少 し歪みあ り。	
311	玄室左奥	坏身	A11.4cm B3.4cm	1~2mm の砂粒を 含む	内面淡灰 色外面青 灰色	良好	立ち上がりは短く、内傾してのびる。受部は湾曲し、先端が外上方にのび丸くおさめる。体部より底部は、丸みをもち底部はヘラ切り調整	左回転	
312	玄室奥中 程	坏身	A11.8cm B3.3cm	1~2mm の砂粒を 含む	内外面青 灰色	良好	立ち上がりは短く、内傾してのびる。受部は湾曲し、先端が外上方にのび丸くおさめる。体部より底部は、丸みをもち底部はヘラ切り調整	左回転	
313	玄室	蓋	A16.0cm B2.8cm	砂粒を含 む	内外面白 灰色	不良	口縁部は垂直であり、口縁部から天井部にかけて丸みをもち段がある。最上部に、平らなつまみを有する。	314と セット	
314	玄室床面 玄門近く	坏身	A15.0cm B4.9cm	砂粒を含 む	内外面白 灰色	不良	体部より口縁部にかけて丸みをもち、外反して、端部は丸くおさめる。底部は、平底で高台を有する。 内外面 ヨコナデ調整	313と セット	
315	玄室床面	高坏	A12.7cmB (4.2)cm残 存	1~2mm の砂粒を 含む	内外面灰 白色	やや 不良	口縁部は、外反気味に端部にいたり丸くおさめる。口縁下方に強い稜を施す。 脚部欠損のため不明	(蓋?)	

遺物 番号	出土地	器 種	径 A B	高 C D	胎 土	色 調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
316	玄室左袖部	高杯 (有蓋)	A13.6cm B16.9cm 脚高12.6cm 脚幅13.8cm		1~2mm の砂粒を 含む	内面青灰 色外面暗 灰色及び 茶色きみ 灰色	良好	杯部立ち上がりは、短く、やや内傾し、端部は丸くなる。受部先端は、やや外反し丸くなる。体部より底部にかけて丸くなりへら削り後、丁寧にヨコナデ調整。脚部は、糸にいたってラッパ状になり、裾部は丸くなる。脚中央に、2条のへら凹線をめぐるし、上下に2段透かしを2方向に呈す。	
317	黄 道	高杯脚部	残高9.9cm 脚部最少径 2.8cm		砂粒を含む	淡黄灰色	普通	脚部中央よりやや下に2条の凹線文、その上の長方形の透孔はクサビ状に切り込み貫通しない。凹線文下方の透孔はわずかな幅で貫通。脚部内面に絞り痕その下方及び脚部表面は横方向のナデ	
318	玄 室	瓶	A8.0cm以下 B22.0cm 以上体部径 16.0cm		密1~2mmの砂粒を含む	内外面暗 色及び 灰色	良好	口頸より口縁に向かって外反し端部欠損。体部は、丸味をおびた下方にのびる丁寧なヨコナデ調整。	
319	玄室左袖部	直口壺	A5.2cm B10.8cm 体部径13.4cm		密1~2mmの砂粒を含む	内外灰色	良好	口頸は小さく、口縁はほぼ垂直方向にのびる。体部中央部にへら描き凹線が2本、中に柳描き列点文を施す。底部は丸底で、体部下より調整にかけて、へら切り調整が見られる。回転ヨコナデ調整。	口頸部に 321と 同じ煎印 がある。 〔N〕
320	黄道床面	長頸壺	A7.8cm B17.7cm 体部径13.5cm		密1~2mmの砂粒を含む	内灰色外 暗灰色	良好	口頸部は、外反しながらのび中央にへら凹線が二本、ヨコナデ調整。体部は、やや肩が張ってへら凹線を施す。体部より底部は、へら削りで仕上げ、底部は扁平きみである。	
321	玄室左袖部	平 瓶	A4.2cm B9.9cm 体部径11.6cm		密1~2mmの砂粒を含む	内外灰色	良好	口頸部は短く直線的にのびる。体部はやや扁平にまるみをもち底部にいたる。回転ナデ調整。底部はへら切り後ナデ調整。	口頸部に 319と 同じ煎印 がある。 〔N〕小型 品。
322	黄道床面 (破砕)	平 瓶	A3.8cm B11.2cm 体部径11.3cm		密1~2mmの砂粒を含む	内外灰色	良好	口頸部は短く、ほぼ直線的にのび、端部で内傾きみになり丸くなる。体部は全体的に丸みをもち底部にいたる。又体部上面に二個の貼付つまみがある。回転ナデ調整。	口頸部に煎印と思われるへら状のきざみがある小型品。
323	黄道床面 (破砕)	平 瓶	A5.6cm B11.4cm 体部径13.7cm		密1~2mmの砂粒を含む	内外淡灰 色	良好	口縁部は短く、外反し端部は厚く丸くなる。体部上面は扁平になり、二個の貼付つまみがつく。胴部にはカキ目調整がみられる。底部はほぼ平らでへら切り後ナデ調整。	

遺物番号	出土地	器種	口径 A 底径 B	口径 口径 口径	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
3 2 4	玄室床面	甕	A 11.8 cm B 1 3.2 cm 体部径9.0cm		密1~2 mmの砂粒 を含む	内灰色外 淡灰色	良好	口頸部は細く絞り長く口縁に 至ってラップ状に広がり へら凹線を施す。体部肩に も一条のへら凹線を施し、 径約1.5cm穿孔。口縁より 体部肩にかけてヨコナテ調 整。体部より底部は丸みを もらへら削り縁ナテ調整。	自然釉 左回転?
3 2 5	玄室左側 壁	提瓶	A4.8cm B14.7cm 体部径11.0 cm 体部厚 さ8.2cm		密1~2 mmの砂粒 を含む	内外暗灰 色	良好	口縁部は外反し、端部は尖 りぎみに丸くおさめている。 体部前面は丸くふくら みをもつ。回転ナテ調整。	自然釉。 窯壁の付 着。小型 品。
3 2 6	玄室左側 壁	提瓶	A4.5cm B15.3cm 体部径11.3 cm 体部厚 さ6.9cm		密1~2 mmの砂粒 を含む	内灰色外 青灰色及 び白灰色 (自然釉 ?)	良好	口縁部は外反し、端部は丸 くなる。体部は少しふくら みをもつ。背面はへら削り 仕上げ。	口頸部に 裏印あり。 「v」
3 2 7	玄室奥左 隅	提瓶	A6.1cm B18.6cm 体部径14.9 cm 体部厚 9.7cm		密1~2 mmの砂粒 を含む	内外灰色	やや 不良	口縁部は外反し、端部は丸 くなる。体部前面は丸くふ くれ背面は少しふくれ中央 で平らになっている。体部 背面に1cmの耳があり、先 端は尖る。回転ナテ調整。	
3 2 8	黄道床面 (破砕)	甕	A25.6cm 胴部最大径 25.4cm B約35cm		砂粒を多 く含む	浅黄褐色	普通	丸底、胴部中央よりやや下 方で最大径口縁はまっすぐ に外反し端部は平たくコ の字状にまとめる。内面の 口縁及胴部上部に横方向の 刷毛目胴部内壁下半に横方 向の刷毛目。外壁は胴部上 半は左上から右下への刷毛 目同中央部でタテ刷毛同下 へ移るにつれ上部と逆の斜 刷毛へ移行する。	
3 2 9	黄道床面	甕	A25cm胴部 最大径24cm B30cm		砂粒を多 く含む	浅黄褐色	普通	丸底、胴部ほぼ中央で最大 径口縁はまっすぐに外反 し、端部は平たくコの字状 にまとめる。口縁部内面に 横ハケ胴部外面上部は左上 から右下への斜ハケ。同下 半は、タテ横等の不規則な ハケ調整。	
3 3 0	左袖部	高坏	A17.2cm B11.5cm 胴高6.6cm 胴径12.5cm		砂粒を含 む	内外面淡 褐色	普通	口縁部は、ほぼ外上に直線 的にのびる。端部は丸みを もつ。口縁下に横をもつ。す こし閉き気味に直下し、ラ ップ状にひろく。内面丁寧 なナテ調整外面ナテ調整	
3 3 1	玄室左袖 部	高坏	A17.4cm B9.9cm 胴高5.2cm 胴径10.5cm		砂粒を含 む	内外面赤 褐色	普通	口縁部は、ほぼ外上に直線 的にのびる。端部は丸みを もつ。口縁下に横をもつ。 すこし閉き気味に直下し、 ラップ状にひろく。内面丁 寧なナテ調整外面ナテ調整	

遺物番号	出土地	器種	口径 高さ	胎土	色陶	完成	形態及び手法の特徴	備考
332	表道(破砕)	暗文付 杯	A18.7cm B5.9cm	極めて良	赤褐色	良	器壁は平底ぎみの底部から外向きにまっすぐ立ち上がる。端部は外反した後に垂直に立ち上がり、丸くおさめる。器壁は端部に近づくにつれてわずかなる内面壁面に左回りの放射状に螺旋文様をはさんで重螺旋状の暗文ある。外面は横方向のミガキ底部へラミガキでミスが付着内面底部は同心円状のミガキ	
333	表道	杯	A12cm B3.5cm	砂粒を多く含む	浅黄褐色	良	底部周辺から壁面下半にかけて内厚。内壁面に横ナデ、その他は磨耗のため不明瞭。	
334	玄室床面 下	杯口縁	A12.0cm B(3.0)cm	砂粒を含む	内面赤褐色 外面赤褐色+黒色	良	体部より口縁に向けて内湾し、端部は丸くおさめる。底部は少し丸みをもつ平底である。内外面粗雑なナデ調整。	
335	玄室床面 下	杯	A13.8cm B4.5cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より口縁に向けて内湾し、端部は丸くおさめる。底部は少し丸みをもつ平底である。内外面粗雑なナデ調整。	
336	玄室床面 下	杯口縁	A14.0cm B(3.4)cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より口縁に外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。底部は欠。内外面粗雑なナデ調整。	
337	玄室床面 下	杯口縁	A14.0cm B(3.2)cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	口縁は外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。体部より底部は欠。内外面粗雑なナデ調整。	
338	玄室床面 下	杯口縁	A12.0cm B(3.9)cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より口縁に向けて内湾し、端部は丸くおさめる。底部は欠損。内外面粗雑なナデ調整。	
339	玄室床面 下	杯口縁	A13.0cm B(5.2)cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	口縁は外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。体部より底部は欠。内外面粗雑なナデ調整。	
340	玄室床面 下	口縁	A11.0cm B(5.0)cm	砂粒を含む	内面赤褐色 外面暗褐色	普通	体部上部は丸みをもち口縁は外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。体部に刷毛目、口縁ヨコナデ調整。	
341 (1)	玄室床面	壺口縁	A11.0cm B(5.5)cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	普通	体部上部は丸みをもち口縁は外反気味に立ち上がり端部は丸くおさめる。体部に刷毛目、口縁ヨコナデ調整。	
341 (2)	玄室床面 下	壺体部		砂粒を含む	内面赤褐色 外面暗褐色	普通	体部のみで、丸みをもって上方に立ち上がる。内面粗雑なナデ調整外面刷毛目あり	

遺物番号	出土地	器種	法 A 高さ	口径 B 径	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
342	玄室床面 下	瓶口縁	A24.0cm		砂粒を含む	内外面赤褐色	不良	体部上方より口縁部に向かつてほぼ直上に立ち上がり、端部は丸くおさまる。内面ヨコナデ面細い割毛目の調整。	
343	玄室床面 下	瓶把手	断面5×2 のいびつな 楕円長7cm の舌状を呈す		砂粒を多く含む	明赤褐色	普通	指による整形が施され体部に貼付けたものと思われる。	

301~327須恵器 328~343土師器

13号墳 須恵器・土師器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A 高さ	口径 B 径	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
601	玄室左側 壁基底石 間	蓋	A10.7cm B4.2cm		1~2mm の砂粒を 含む	内外面灰 色	良好	全体的に丸みがかっており、天井部はへら削りがうすく残る。端部にはほぼ垂直にのび、丸くおさまる。内外面ナデ調整。	右回転 602と セット
602	玄室左側 壁基底石 間	坏	A10.0cm B3.5cm		1~2mm の砂粒を 含む	内外面白 灰色	良好	たちあがりは短かく内傾し、口縁先は丸くおさめている。受部先端はやや上向きになり、体部より底部にかけて丸みをもち、底部はへら削りにより平である。内外面ナデ調整。	左回転 601と セット
603	羨道	坏	A11.4cm B3.2cm		1~2mm の砂粒を 含む	内外面	良好	体部は丸みをもち、口縁部で外反し、端部は丸みをもつ。底部は平底で高台を有する。	
604	羨道閉塞 石内	蓋	A17.0cm B3.4cm		は2砂粒 を含む	内外面灰 青色	良好	口縁部は垂直であり、口縁部から天井部にかけて丸みをもち最上部に凹つまみを有する。内外面ナデ調整。	605と セット
605	羨道閉塞 石内	坏	A15.0cm B7.2cm		砂粒を含 む	内外面灰 青色	良好	体部より口縁部はやや外反ぎみに直上し、端部は丸みをもつ。底部は平底で貼付高台を有する。内外ヨコナデ調整。	604と セット
606	羨道	高坏	A12.8cm B5.0cm		砂粒を含 む	内外面白 灰色(淡 灰黑色)	不良	口縁部はほぼ外上に直線的にのびる。端部は丸みをもつ。口縁下に壁をもつ。脚部欠損。内外ナデ調整。	
607	玄室右袖 部付近	平瓶	A6.2cm B12.0cm		1~2mm の砂粒を 含む密	内外面灰 色	良好	口縁は外反し、端部は丸くなる。口縁下に1条のへら凹線を施す。ヨコナデ調整。体部より底部にかけて丸みをもち、底部はへら削り仕上げ。	体部半分 欠損
608	玄門右袖 部	平瓶	A5.6cm B10.7cm 体部径12.4 cm		1~2mm の砂粒を 含む密	内灰色及 び外暗灰 色	良好	口縁は外反し、端部は丸くなる。口縁下に1条のへら凹線を施す。体部上面は、扁平になり肩より底部にかけて、へら切り後ナデ調整。底部はほぼ平らである。	

遺物番号	出土地	器種	法 A B 口 径 高 さ	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
609	右袖部	台付広口壺	A9.8cm B17.9cm 脚部径18.5cm 脚部高4.0cm 脚部径13.3cm	青	内外灰色	良好	口縁部は外反しながらのび先端は丸くおさめる。体部は丸みがみられ、肩部は一条のヘラ凹線を施す。脚部はラップ状に広がり一条のヘラ凹線を施す。回転ナデ調整。	自然釉あり
610	周溝	短頸壺	A8.9cm B17.7cm 胴部最大径21.2cm	大粒の砂粒を含む	淡黄色	不良	底部はやや安定性に欠ける。胴部中央で強く張り出す。器壁の厚みは均一。口縁部はやや上向いた「く」の字状、外面胴部中央に2条の凹線をめぐらす。全体に磨耗。	
611	玄室左側壁底石間	暗文小型高杯	A8.1cm B5.0cm	やや砂粒を含む	赤橙色	良	口縁端部は丸くおさめる。全体に丸い感じ。脚部は貼付でラップ状に開く。成形は丁寧。杯部内面に右まわりの2段の放射状暗文。螺旋なし。脚部外面の一部に石まわりの暗文。杯部外面へラ磨き。	601,602をのせる
612	右玄門	暗文杯	A12.7cm B4.0cm	極めて良	赤橙色	良	曲線状に外反して立ちあがり口縁にわかうにつれやや厚みを減じる。内面に左まわりの放射状暗文。内面底部に螺旋状暗文。外面体部へラ磨き。底部へラケズリ後へラ磨き。	
613	右玄門	暗文杯	A13.0cm B4.0cm	極めて良	赤橙色	良	やや丸底ぎみの底部から曲線状に内傾ぎみに立ちあがり口縁端部は丸くおさめる。内面に左まわりにやや疎な放射状の暗文。内面底部、緩な螺旋状の幅広いの暗文。内面ナデ。外面へラ磨き。	
614	玄室	土師壺	A24.4cm B23.7cm	砂粒を多く含む	浅黄橙色	普通	丸底。胴部中央よりやや下方で最大幅を計る。口縁端部は垂直ぎみに立ちあがる。内面口縁部横方向の刷毛目、外面胴部上半部方向の刷毛目、下半部方向の刷毛目。	

601～610須恵器 611～614土師器

10号墳 弥生土器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A B 口 径 高 さ	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
218	墳丘	弥生鉢	A18.0cm B(3.9)cm	良	内赤橙色 外黄橙色	普通	口縁端部断面逆三角形。内面縦方向の刷毛目。	
219	墳丘	弥生壺	A12.1cm B(3.6)cm	普通	赤橙色	普通	頸部は曲線状に外反し口縁端部は断面三角形を呈する。肩部外面に2条の凹線。頸部外面回転ナデ。磨耗。	

遺物 番号	出土地	器種	法 A B	量 口 高 寸 法	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
220	墳丘	弥生壺	A21.2cm B(3.3)cm	口高	砂粒を少し含む	明褐色	普通	口縁部は水平ぎみに開く。端部外面はほぼ垂直で2個1組の円形浮文と2状の凹線、縁な幅がき波状文、内面口縁部上部に外面のものより大きめの櫛がき波状文。	
221	墳丘	弥生壺	B(8.3)cm 残存表	口高	砂粒を含む	明褐色	普通	胴部上半は垂直に立ちあがり口縁部はするどく外反する。端部外面に3条の凹線。磨耗。	

11号墳 弥生土器観察表

遺物 番号	出土地	器種	法 A B	量 口 高 寸 法	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
344	墳丘	弥生壺 口縁及 頸部	A20.4cm B(8.4)cm	口高	砂粒を多く含む	明赤褐色	普通	頸部は垂直に立ち上がり口縁部は水平近くまで外反する。口縁端は厚みを増し、端部に三状の凹線文を施す。口縁部外壁は横方向のナゲ頸部はタテ方向に刷毛目が施され、下端に二本の凹線文口縁内壁は横方向のナゲ頸部内壁は絞り痕が残る。	
345	墳丘	弥生壺 口縁部	A12.6cm B(4.5)cm	口高	砂粒を多く含む	明褐色	普通	頸部は曲線状に外反し、縁端部はカギ状を呈する。端部外面に二条の凹線、頸部には二条の凹線がへら押圧文をささむ。頸部外壁は横方向のナゲ胴部上端に不規則なタテハケ。	
346	墳丘	弥生壺 頸部	頸部径10.8 cm B(10.5)cm	径	粗い砂粒を多く含む	赤褐色	良	頸部はほぼ垂直に立ち上がり外反して口縁に至る。残存部では肩部が最も厚い。頸部外面に6本の凹線を施す頸部内面に指頭圧痕。	
347	墳丘	弥生高 環口縁 部	A20.4cm B(3)cm	口高	砂粒を多く含む 雲母を含む	明褐色	普通	口縁部外壁に4条の凹線文口縁部はやや丸みをもって垂直に立ち上がる。内外面横ナゲ、底部はゆるくカーブを描く。	
348	墳丘	高坏胴	胴部径9cm B(4.5)cm	径	砂粒を多く含む 雲母を含む	明赤褐色	普通	内面へら押し表面上部に横方向五条のへら描き北線文、その下にタテ方向のへら描北線文端部に近づくにつれ厚みを増し、頸部はほぼ器壁に垂直に平たくまどめ、二条の凹線文を施す。	

13号墳 弥生土器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A B	量 寸 法	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
619	石室床面 下	弥生瓦	A16.1cm B(3.4)cm		砂粒を含む	褐色	普通	胴部欠損。口縁はすどく外反する。外面刷毛目。	

9号墳 古墳時代以降土器観察表

遺物番号	出土地	器種	法 A B	量 寸 法	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
135	玄室中程	小皿	A8.7cm B1.0cm		1~2mmの砂粒を含む	内外白黄色	やや不良	口縁は外反し、端部は丸くおさめる。底部は平底。内外面ナデ調整。	
136	玄室中程	小皿	A8.7cm B1.4cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面赤褐色	良	口縁は外反し、丸みをもちながら端部は丸くおさめる。底部は平底。内外面は粗雑なナデ調整。	
137	玄室中程	小皿	A9.1cm B1.5cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面赤褐色	良	直線的に外反し、端部は丸くおさめる。内外面、丁寧なヨコナデ調整。	
138	玄室中程	杯	A14.8cm B3.6cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面淡褐色	普通	体部より口縁部にかけて外反し、端部は丸くおさめる。底部は平底。内外面ヨコナデ調整。	
139	玄室中程	碗	A16.2cm B5.4cm		1~2mmの砂粒を含む	内外面灰白色	不良	体部より口縁部にかけて丸みもちながら外反し、端部は尖る。全体的にうすい(厚み)。底部は平底で三角の高台がつく。調整は磨耗がひどく不明。	
140	玄室中程	碗	B(4.0)cm		1~2mmの砂粒を含む	内面黒色 外面淡褐色	不良	体部より丸みもち外反し、立ち上がる。底部は平底で三角の高台がつく。調整不明。	
141	玄室中程	碗	A14.8cm B5.5cm		1~2mmの砂粒を含む	内面黒色 外面白黄色	不良	体部より口縁部にかけて丸みもち、外反し、端部は丸くおさめる。底部は平底でハの字形の高台がつく。調整不明。	
142	玄室中程	碗	A16.1cm B5.4cm		良	内淡黒褐色 外灰白 一部淡黒褐色	やや不良	断面方形の貼付け高台。口縁は底部よりゆるやかに外反して立ちあがり端部は肥厚なみに丸くおさめる。磨耗。	
143	玄室中程	碗	A15.2cm B5.8cm		1~2mmの砂粒を含む	内面黒色 外面黄灰色+黒色	やや不良	体部より口縁部にかけて丸みもちながら外反し、端部は丸くおさめる。底部は平底で高台がつく。内面、細部調整不明、外面ナデ調整。	
144	玄室中程	小形丸底鉢	A18.2cm B(10.5)cm		普通砂粒を含む	内外面暗褐色	普通	体部より口縁部に向かって丸みもち、口縁部より少し外反する。端部はほぼ角に切つてある。底部は欠失。内外面、ヨコナデ調整後外面細かい刷毛目調整。指圧痕。	

遺物番号	出土地	器種	法量 A B 口径高さ	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
145	玄室	羽釜片	A19.0cm B(5.0)cm	砂粒を多く含む	内外面淡褐色	良	体部欠損口縁部は内彎し端部はやや角にちかい、幅約2.2cmの鋸が斜下方向に付く。内面はヨコ方向に刷毛目が見られる。外面ヨコナデ調整。	
146	玄門付近	鍋	A31.5cm B14cm	良砂粒を多く含む	内外面褐色	良好	体部より口縁部に向かって丸みをもち、口縁部より「く」の字形に外反し、端部は外側に斜下へ角に切つてある。底部は丸底である。内外面、ヨコナデ調整後寬い刷毛目調整。体部上方は指圧痕。	

135~146土師器

11号墳 古墳時代以降土器観察表

遺物番号	出土地	器種	法量 A B 口径高さ	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
351	羨道	杯	A12.5cm B3.1cm	1~2mmの砂粒を含む	内外面灰色	普通	体部より口縁部にかけて直線的に外反し、端部は丸くなる。ヨコナデ調整底部は、平底でヘラ切り後ナデ調整	ひだすきが見られる。
352	玄室	杯	A14cm B3cm	砂粒散在	白灰色	普通	平底で体部は上方へかけてほぼまっすぐに開く。外壁は回転ナデ底部は静止ヘラ切内面ナデ。	
353	羨道	杯	A12.7cm B3.6cm	1~2mmの砂粒を含む	内外面灰色	普通	体部より口縁部にかけて丸みをもちながら外反し、端部は丸くなる。ヨコナデ調整、整底部は、平底でヘラ切り後ナデ調整	ひだすきが見られる。
354	玄室西側	碗	A17.0cm B6.3cm	1~2mmの砂粒を含む	明灰色	やや不良	体部より口縁部にかけて直線的に外反し、端部は丸くなる。ヨコナデ調整、底部は、高台状に削り平底である。	
355	玄室	杯	A15.5cm B4.8cm	良	浅黄色	普通	底部よりゆるやかな曲線をえがきながらやや外反して立ちあがる。体部中央よりやや下あたりから直線状に立ちあがる。内面刷毛目、外面刷毛状工具による回転ナデ、やや磨耗。	須恵杯の模倣か?
356	玄室	杯	A15.0cm B4.8cm	良	浅黄色	普通	底部よりゆるやかな曲線をえがきながらやや外反して立ちあがり端部は丸くおさめる。内面細かな刷毛目、外面体部刷毛状工具による回転ナデ、やや磨耗。	"
357	玄室	小皿	A6.0cm B0.8cm	良	淡橙色	良	極めて小型、成形雑、底部ヘラ切り。磨耗	
358	玄室	小皿	A10.2cm B1.6cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より口縁部に向かって外反し端部は丸くおさめる。底部は平底、内外面丁寧なヨコナデ調整	

通券 番号	出土地	器種	高さ 口径 容積	胎土	色調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
359	玄室	小皿	A10.3cm B2.3cm	良	浅黄褐色	良	口縁端部丸くおさまる。内外面回転ナデ。底部大半欠損。	
360	玄室	小皿	A11.0cm B2.2cm	砂粒を含む	内外面白黄色	良	体部より外反気味に立ち上がり端部は丸くおさまる。底部は平底でヘラ切り後ナデ調整、内外面ヨコナデ調整。	
361	玄室	小皿	A10.0cm B2.5cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より外反気味に立ち上がり端部は丸くおさまる。底部は平底でヘラ切り後ナデ調整、内外面ヨコナデ調整。	
362	玄室	小皿	A10.5cm B2.4cm	大粒の砂粒を含む	灰白色	不良	成形雑。口縁端部は丸くおさまる。内外面回転ナデ磨耗。	
363	玄室	小皿	A10.7cm B2.6cm	砂粒を少し含む	淡褐色	普通	平底より、直線状に外反して立ち上がり口縁端部は丸くおさまる。成形やや雑。内外面ナデ。	
364	玄室	小皿	A10.6cm B2.2cm	良	淡褐色	普通	底部にくらべて体部の器壁厚い。口縁端部は丸くおさまる。内外面回転ナデ。底部ヘラ切り。	
365	玄室	小皿	A10.8cm B2.7cm	良	灰白色	普通	成形雑。口縁端部は丸くおさまる。底部ヘラ切り。内外面回転ナデ。やや磨耗。	
366	玄室	小皿	A10.5cm B3.0cm	良	灰白色	良	安定した底部。口縁端部はやや肥厚して丸くおさまる。内外面回転ナデ。底部ヘラ切り。	
367	玄室	小皿	A11.0cm B2.6cm	良	淡褐色	普通	口縁端部はやや肥厚して丸くおさまる。内外面回転ナデ。底部ヘラ切り。	
368	玄室	小皿	A10.0cm B3.0cm	砂粒を含む	内外面淡褐色	やや不良	体部より口縁部にかけて外反し、端部は丸くなる。底部は平底で調整は雑である。内外面ヨコナデ。	
369	玄室	小皿	A11cm B1.9cm	砂粒を多く含む。金雲母混在	浅黄褐色	良	内外面磨耗により表面調整不明。	
370	玄室	小皿	A11.6cm B1.9cm	砂粒を含む	内外面暗褐色	良	体部より、口縁部にかけて外反し端部は丸くなる。底部は平底。内外面粗雑なナデ調整。	
371	玄室	小皿	B(1.7)cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より口縁欠失。底部は平底でヘラ切り後雑な調整。	
372	玄室	小皿	A12.4cm B2.8cm	砂粒を含む	内外面赤褐色	良	体部より口縁部にかけて直線的に外反し、端部は丸くおさまる。底部は平底内外面丁寧な回転ナデ調整。	
373	玄室	小皿	A12.7cm B3.5cm	砂粒を含む	褐色	良	体部器壁薄い。口縁端部肥厚して丸くおさまる。磨耗。	

遺物番号	出土地	器種	口径 A 底径 B	口径 の 高さ	胎土	色調	装束	形態及び手法の特徴	備考
374	玄室	小皿	A 13.0cm B 3.4cm		良	灰白色	良	体部は直線状に外反して立ち上がり口縁端部はやや肥厚して丸くおさまる。底部へう切り。内外面回転ナデ。	須恵器に近い焼成・胎上を示す。
375	玄室	小皿	A 13.7cm B 3.9cm			内面赤褐色 外黒色 外面赤褐色	良	体部より外反しながら立ち上がり端部は丸くおさまる。底部は平底。内外面は丁寧なナデ調整。	
376	玄室	小皿	A 11.0cm B 3.9cm			内面淡褐色 外黒色 外面淡褐色	普通	体部より口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。底部は平底で、へう切り後末調整。内外面ナデ調整外面指圧痕あり。	
377	玄室	皿	A 11cm以上 B 3cm以上			内面黒色 外面赤褐色	良	体部口縁部欠欠。底部は平底で八の字形の高台をもつ内面一部へう状工具による暗文がみられる。外面ヨコナデ調整。	
378	羨道	埴	A (3.4)cm 高台径8.2cm			内外面赤褐色	良	口縁部欠欠。体部は外反する。底部は平底で、貼り付け高台。内外面細部調整不明。	
379	玄室	埴	A 15.2cm B 6.2cm			内面黒色 一部赤褐色 外面赤褐色	良	体部より口縁部にかけて外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさまる。底部は平底で貼り付け高台をもつ。内面一部へう状工具による暗文がみられる。外面丁寧なヨコナデ調整。	
380	玄室	埴	A 13.1cm B 5.5cm		良	内黒色 外灰白色	良	断面方形貼り付け高台。体部器壁均一で、ゆるやかな曲線をえがきながら外反して立ち上がり口縁端部は丸くおさまる。やや磨耗。	
381	玄室	埴	A 13.5cm B 5.9cm		良	内黒色 外淡褐色 一部黒色	良	断面5角形状の雑な貼り付け高台。ゆるやかな曲線をえがきながら外反して立ち上がり口縁端部はやや肥厚し丸くおさまる。内面体部の一部にへうによる暗文。外面回転ナデ。やや磨耗。	
382	玄室	埴	A 15.0cm B 5.1cm			内面黒色 外面白黄色	良	体部より口縁部に向かって丸みをもって立ち上がり、端部は丸くおさまる。底部は平底で高台をもつ。内面にへう状工具により暗文がみられる。外面ナデ調整。	
383	玄室	埴	A 15.8cm B 4.8cm			内面黒色 外面赤褐色	良	体部より外反しながら立ち上がり端部は丸くおさまる。底部は平底で高台があったと思われるが磨耗している。内外面ナデ調整。	
384	玄室	埴	A 15.0cm B 5.8cm 高台深6.4cm			内外面黒色	良	体部より口縁部に向かって丸みをもって立ち上がり、端部は丸くおさまる。底部は平底で貼り付け高台をもつ。内外面にへう状工具により暗文がみられる。	

遺物 番号	出土地	器 種	法 A B	口 高 径 き	胎 土	色 調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
385	玄室	埴	A17.0cm B6.6cm高 右径7.7cm		砂粒を含む	内外面黒色	良	体部より口縁にかけて外反気味に立ち上がり、端部は丸くおさまられる。内面には凹縁がみられる。底部は平底で高台がつく。胴部不明であるが内外面細いヘラ状工具による暗文がみられる。	
386	玄室	土師甕	A18.7cm B約15cm		砂粒を多く含む	明赤褐色	普通	丸底で口縁部は外側に屈曲し、端部は丸くおさまる。胴部外面は上半にタテハケが下半に左上から右下への斜ハケが残存する。胴部の厚さはほぼ均一で口縁は胴部よりやや肉厚となっている。	
387	玄室	不明	A29cm B4.9cm		砂粒を多く含む 雲母含む	明赤褐色	普通	胴は上端より約1/3の部分から器壁にほぼ垂直に立ち上がり幅1.5cm高さ約2.5cmである。外壁、胴の表面は横ナデで下側にタテハケがある。胴直下に貼付痕残存内面上半に横ナデ痕か。	
388	玄室	不明	A27cm B6cm		砂粒を多く含む 雲母散在	明赤褐色	普通	上部より約1/3は近から器壁にほぼ垂直に胴が伸びる。胴厚1cm幅2cm外壁横方向ナデ、下端に指圧痕。	
389	玄室	師器	A21.6cm 脚部最大径27cm 胴部B約14cm 踵込B21.5(推)		砂粒を多く含む	浅黄橙色	普通	体部内脚最大径部直下より脚がのびる。脚最大径約4cm脚長約14cm口縁端部は平たくコの字状にまとめる。踵は口縁端より2cm下から器壁にほぼ垂直に立ち、幅0.5、高さ0.6~0.7cmである。タガの直下にヘラ先による押圧が見られる。胴部下半に格子状タタキ目あり脚部は表面にヘラ削りに痕があり器壁内側には脚部接着のための指頭圧痕が見られる。	
390	玄室	煎餅	脚最大径約4.5cm 残存長約10cm 断面径約2cm		砂粒を多く含む	明赤褐色	普通	表面ヘラ削りタテハケ残存部分あり、貼付の痕跡残る。	

351~354須恵器 355~390土師器

12号墳 古墳時代以降土器観察表

遺物 番号	出土地	器 種	法 A B	口 高 径 き	胎 土	色 調	焼成	形態及び手法の特徴	備考
501	表道	須恵皿	A14.7cm B1.5cm		砂粒を多く含む	内外面青白灰色	不良	器壁は扁平な底部から角度をもって外向に立ちあがり、口縁付近でやや外反さみ。縁端は丸くおさまる。底部外壁に同部へり部が左足部に残る。器部内外面及び底部内面はナデ痕全体的に磨耗。	

13号墳 古墳時代以降土器観察表

遺物番号	出土地	器種	形状 Aの高さ Bの長さ	土質	色調	状態	形態及び手法の特徴	備考
620	トレンチ内	小皿	A8.0cm B1.1cm	良	淡黄褐色	やや不良	口縁端部は丸くおさまる。磨耗。	
612	トレンチ内	小皿	A8.1cm B1.3cm	良	淡黄褐色	普通	底部器壁厚い。やや磨耗。	
622	トレンチ内	小皿	A8.7cm B1.1cm	砂粒を含む	淡褐色	普通	底部器壁厚い。底部へら切り。磨耗。	
623	トレンチ内	小皿	A9.0cm B1.0cm	良	淡黄褐色	普通	器高低い。口縁端部は丸くおさまる。やや磨耗。	
624	トレンチ内	小皿	A8.8cm B1.0cm	普通	淡褐色	普通	成形雑。底部へら切り。磨耗。	
625	トレンチ内	小皿	A8.3cm B1.3cm	砂粒を含む	淡褐色	普通	成形雑。器高低。内外面ナデ。磨耗。	
626	トレンチ内	小皿	A8.8cm B1.5cm	砂粒を多く含む	内外面白黄色	不良	体部より口縁部にかけて外反し。端部は丸くおさまる。底部は平底。	
627	トレンチ内	小皿	A9.0cm B1.6cm	良	明黄褐色	普通	底部中心より口縁端部に向かうにつれ器壁の厚み減。口縁端部は丸くおさまる。やや磨耗。	
628	トレンチ内	小皿	A9.0cm B1.5cm	良	淡黄褐色	普通	成形雑。	
629	トレンチ内	小皿	A9.1cm B1.8cm	良	淡黄褐色	やや不良	成形やや雑。磨耗。	
630	トレンチ内	小皿	A12.1cm B2.4cm	良	明黄褐色	普通	成形雑。外面体部回転ナデ。	
631	トレンチ内	碗	A15.1cm B(3.3)cm	良	内黒色外淡黄褐色	良	口縁端部は丸くおさまる。内外面ヨコナデ。体部下反欠損。	
632	トレンチ内	碗	高台径6cm	良	淡黄褐色	普通	ややきゃしゃな感じの貼り付け高台。やや磨耗。	
633	トレンチ内	碗	色B(3.2)cm	良	内黒色外淡黄褐色	良	貼り付け高台。外面やや磨耗。	

10号墳 鉄器観察表

遺物番号	出土地	器種	法量	形態及び手法の特徴	備考
214	玄室	金釘片	断面方0.6cm正方形 現存長3.8cm	鍛造か	
215	玄室	釘か	断面一辺0.6cm方形 か現存長4.9cm		
216	玄室	釘	断面一辺0.6cm方形(中央部) 現存長7.4cm	鉋先は角錐状を呈する鍛造	
217	玄室	釘	全長11.1cm断面方形 0.8×1.1cm		

11号墳 鉄器観察表

遺物番号	出土地	器 種	法 数	形態及び手法の特徴	備 考
394	玄 室	鏃	長さ21cm以上最大幅3.0cm	鍛造。先端と中央部欠損。基部先端曲げられている。	
395	玄 室	鏃	現存長4.5cm9.4cm 断面先端厚0.2cm 床状部厚0.3cm	頭部がやや扁平先端は少しねじれる。	
396	玄 室	鏃	身部現存長2.3cm 最大幅1.3cm基部 現存長8.7cm最大 幅0.9cm	身部下半欠損。基部上半欠損。基部断面方形。	
397	玄 室	鏃	現存長4.3cm最大 幅1.3cm基部断面 方形 長径0.6cm	先端やや実る。基部断面方形で基部長い。	
398	玄 室	鏃	現存長6.9cm最大 幅3.6cm	基部に錆付着。鉄片2片付着。	
399	玄 室	鏃 片	頭部長6.7cm同最 大幅3.3cm厚さ0.4 cm床部断面0.3× 0.5の長方形	基部に鉄が付着	
400	玄 室	鏃	現存長4.8cm最大 幅3.4cm	二等辺三角形の鏃と考えられる。上半部と基部より下部を欠損。	
401	玄 室	鏃 頭 部	現存長5.7cm最大 幅2.8cm厚さ約0.2 cm	楕円形板状 鍛造か。	
402	玄 室	刀 子	刀部長6.3cm 鋒部厚0.5cm 刀部現存長2.3cm 断面方形 0.5×0.8cm	鍛造か。	
403	玄 室	刀 子	現存長6.7cm 最大幅1.3cm 柄部長2.3cm	先端欠損。柄の先端錆により詳細不明。	
404	玄 室	不 明	径1.1×1.4楕円 現存長3.6cm	に厚さ0.2弱の鉄板を筒状に丸める。	
405	玄 室	釘 ?	現存長4.7cm 断面方形 0.3×0.9cm	鍛造	
406	玄 室	釘 頭	現存長2.7cm 断面方形 0.5×0.7cm	頭部を折り曲げる。	
407	玄 室	釘 頭	現存長3.6cm 断面方形 0.5×0.7cm	頭部屈曲丹付着か?	
408	玄 室	釘	現存長4.6cm断面 0.6×0.9の長方形	先端屈曲	
409	玄 室	釘	現存長5.3cm断面 0.6×0.7cmの方形	頭部がほぼ直角に屈曲下端の断面は凹形。	
410	玄 室	釘	現存長6cm断面正 方形一辺0.6cm	頭部屈曲丹付着か。	
411	玄 室	クサビ頭	断面0.5×0.8cm 長方形3.7cm	長方形断面で先端を折り曲げて頭とする。先端は角錐状にとがる。丹が付着か。	

遺物番号	出土地	器 種	注 意	形類及び手法の特徴	備 考
412	玄 室	不 明	全長1.4cm 断面円形径0.2cm	頭部偏平	飾り金具? 棺金具?
413	玄 室	不 明	全長1.7cm蓋部断面 円形径0.4cm	頭部円柱状金箔付着。	飾り金具? 棺金具?
414	玄 室	不 明	底金径2.5cm 蓋径0.5cm	底金と頭部に金箔付着。	飾り金具? 棺金具?
415	玄 室	馬 具	現存長5.3cm上端 断面径0.6cmの円形	丹が付着?	
416	玄 室	馬 具	現存長10.7cm断面 0.5×0.7長方形	416~423響一括出土	
417	玄 室	馬 具	現存長8.2cm		
418	玄 室	引手金具頭部	径2.8cm		
419	玄 室	引手金具	頭部径3cm 現存長10.5cm	頭部は屈曲	
420	玄 室	引手金具頭部	頭部径2.5cm		
421	玄 室	引手金具	頭部径3.4cm 現存長11.2cm	頭部は屈曲棒状部分屈曲	
422	玄 室	鏡 板			
423	玄 室	鏡 板	長さ8cm 最大幅7.1cm	環部断面三角形連結部厚さ0.2cm保 存良好	
424	玄 室	馬具環状紋 具	最大幅4cm 長さ5.4cm 断面円形径0.6cm		
425	玄 室	紋 具	全長8cm 最大幅4.5cm 断面円形径0.8cm		
426	玄 室	紋 具	全長7.6cm 最大幅4.2cm		
427	玄 室	馬 具	断面方形長径 0.9cm	カタカナの「コ」の字状に折り曲が る。	
428	玄 室	馬 具	現存長4.7cm 断面方形径0.4cm	先端を馬蹄形に白がる。	
429	玄室右隅	櫛		連結部分錆により不明瞭保存状態良 好。引手金具の長さがちがう。	
430	玄室中程右 側壁	鎧	長さ21cm以上 幅5.5cm	三連の兵弁鎧	
431	玄 室	鎧	長さ22cm以上 幅4.3cm	三連の兵弁鎧。先端欠損。三連目欠損。	

12号墳 鉄器観察表

遺物番号	出土地	器種	法量	形態及び手法の特徴	備考
502	羨道	不明	現存長5.1cm 最大幅0.8cm 断面円形径0.8cm		
503	羨道	不明	現存長約6cm 最大幅0.7cm 断面円形径0.6cm	馬具?	

13号墳 鉄器観察表

遺物番号	出土地	器種	法量	形態及び手法の特徴	備考
615	羨道	不明	現存長4.4cm断面 一边0.4cmの菱形	内部中空	
616	羨道	釘	現存長5.5cm断面 一边0.4cmの方形	先端角錐状	
617	羨道	釘	現存長4.1cm断面 円形径0.5cm	頭部扁平	
618	羨道	鉄鍔?	現存長6.5cm最大 幅1.3cm断面方形 (長さ1.1cm)	鍛造	

金、銀環観察表

遺物番号	出土場所	外形(mm)	断面形 (mm)	外装	備考
131	9号墳 羨道部	26.1×24.7	8.6×6.4	金	腐蝕ほとんどなく、金張りがほぼ完存。環は扁平。金箔は、切れ目端面で閉じている。
132	玄室中央部	26.0×24.7	8.6×6.2	金	腐蝕ほとんどなく、金張りが完存。金箔は、切れ目端面で閉じている。
133	"	27.0×25.2	7.2×7	金	腐蝕はかなり進行。外面ほとんどに鍍金が生じているが、ごく僅かに金張りを認める。欠損部分では、鍍金を認める。
134	"	27.1×25.5	7.0×6.7	金	腐蝕はかなり進行。外面に鍍金が浮きだしているが、ごく一部分だけに金張りを観察できる。欠損部分では、鍍金を認める。
212	10号墳 玄室中央部	24.0×21.0	6.2×5.0	金	腐蝕、金張りが少し残っている。欠損部分で、鍍金を観察できる。小型品。
213	"	24.0×22.0	6.5×5.0	金	腐蝕はしているが、保存状態は良い方。金張りを認める。小型品。
391	11号墳 "	10.8×19.5	2.3×2.5	銀	銀製品。現在は酸化のため、黒色を呈する。番線を描け輪としたもの。
392	"	29.0×26.8	5×5.2	?	腐蝕顕著。欠損部分では鍍金により相当劣化している。大型ではあるが、環身は、細身、切れ目部分も1mm余に過ぎない。金か銀かは不明。
393	"	300×400	5.5×9.5	銀	銀製の厚さ0.3mm余りの空心環。環自体は扁平である。酸化のため劣化著しい。平欠。凹面は、図上復元。

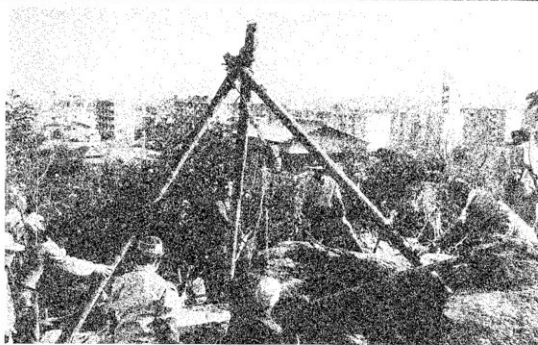
ガラス玉観察表

番 号	径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	備 考
106	16.0	9.2	2.5(max)	一部緑色が認められる。風化し、光沢は、失なわれている。丸味を帯びた玉。最も保存状態の良好な玉の一つ。
107	10.0	7.2	2.0(min)	風化し、光沢、色は失なわれている。孔の一部も含め、剥離がみられる。丸味を帯びる。
108	8.5	8.5	3.0	半欠、風化のため光沢、色は失なわれている。風化は内部まで及び白色を呈する。
109	10.5	8.8	2.5~2.0	一部緑色が認められる。風化し、光沢は失なわれている。断面が顕著、よく残る玉の一つ。
110	9.0	7.8	2.5(min)	風化し、光沢、色調は失なわれている。剥離も著しい。表面には、小孔が多くみられる。
111	7.8	7.5	2.2(min)	風化し、光沢、色調は失なわれ、剥離も表面全体に及ぶ。表面にはガラス質特有の小孔が多くみられる。
112	10.1	7.5	4.0(min)	半欠、風化顕著、光沢、色調は失なわれ、剥離も全体に及ぶ。特に孔部分では著しく、孔は現状よりかなり小さいと思われる。
113	9.6	8.2	2.5(min)	一部緑色を認める。半欠、風化のため、光沢を失なっている。保存度は良好な方。ふるとり断面を観察できる。
114	9.5余	7.2	2.3(min)	半欠、風化のため、光沢、色を失なっている。孔が、やや斜めに穿たれている。
115	9.5	6.8	2.8(min)	風化のため、光沢、色が失なわれている。全面に剥離が及んでいる。一部分欠損がある。
116	8.5	4.6	3.5~3.0	緑色を観察できる。風化のため、光沢、色が失なわれている。高断面がハッキリと認められる。最も遺存度がよい玉の一つ。
117	7.8	4.5	2.8(min)	風化し、光沢、色を失なっている。全面及び孔に剥離が顕著にみられる。一部分欠損する。
118	10.0	5.2	4.5	半欠、風化し、光沢、色を失なう。全面に剥離がみられるが、緑色を呈するガラス質の遺存もみられる。
119	8.0	5.6	2.5(min)	風化し、光沢、色を失なう。剥離も全体に及んでいる。他の風化した色が白を呈するのに対し、本例は、緑がかった色である。
120	9.0	5.5	3.9	風化し、光沢、色を失なう。高断面を観察できる。遺存度の良い方。
121	8.2	4.9	3.0	風化し、光沢、色を失なう。三片に割れており、暗緑色を呈する風化していないガラスを芯部分を観察できる。
122	7.8	5.1	2.8	半欠、風化し、光沢、色を失なう。剥離も顕著。断面には、暗緑色を呈する風化していないガラスの芯部分を観察できる。
123	10.0余	6.1	—	半欠欠損。風化し、本来の光沢、色を失なうものの、緑色を呈する地肌がみられる。
124	8.1	5.9	2.5(min)	風化し、光沢、色を失なう。剥離も顕著。高断面も観察できる。暗緑色を呈する風化していないガラスを一部分欠損
125	7.0	5.8	1.5(min)	風化し、光沢、色を失なう。剥離も顕著。暗緑色を呈するガラスをごく一部で観察可能。
126	8.5	6.6	1.8(min)	風化し、光沢、色を失なう。剥離も顕著。地肌は、やや緑がかる。
127	7.2	4.0	2.1(min)	風化のため、光沢、色を失なう。表面の一部に緑色がみられる。それ以外と、孔の内側に剥離が違ふ。

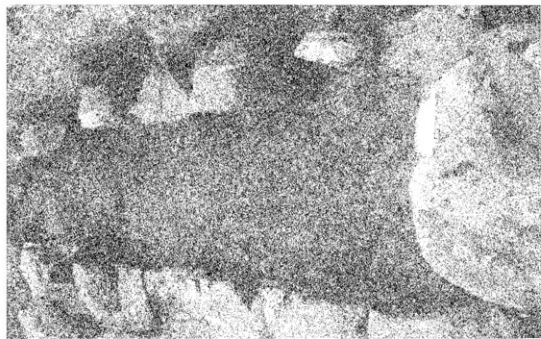
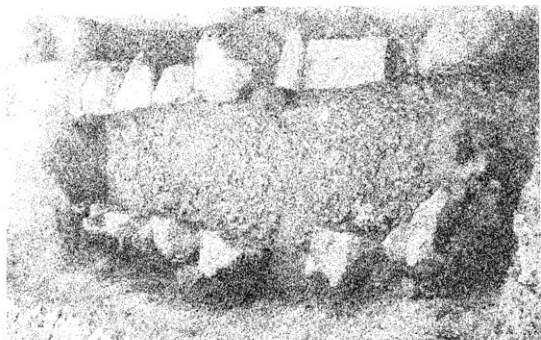
番 号	径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	備 考
128	8.3	4.0	3.2(min)	風化のため、光沢、色を失なう。三つに割れているため内部が暗緑色を呈し風化していないガラスとわかる。
129	8.5以上	4.5	2	風化のため、光沢、色を失なう。欠損著しい。
130	8余	3.6	—	片のみ遺存。風化のため、光沢、色を失なう。内部は、風化していないガラスで暗緑色を呈する。

(出土ガラス玉は全て、玄室中央左よりで出土)

图 版



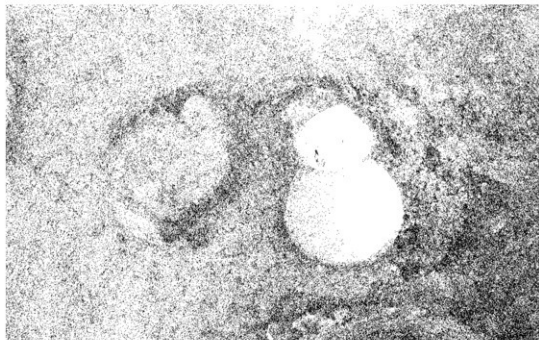
(1) 調査地域全景 / (2) 発掘作業風景 (11号墳)



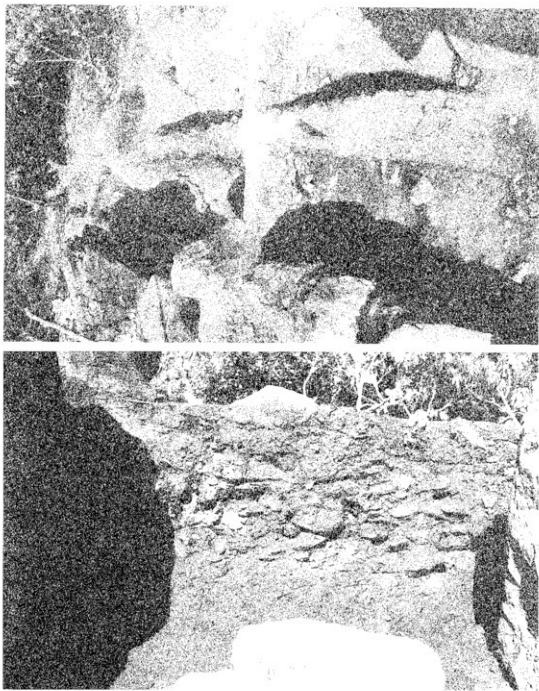
(1) 9号墳石室全景 / (2) 9号墳床石取払後



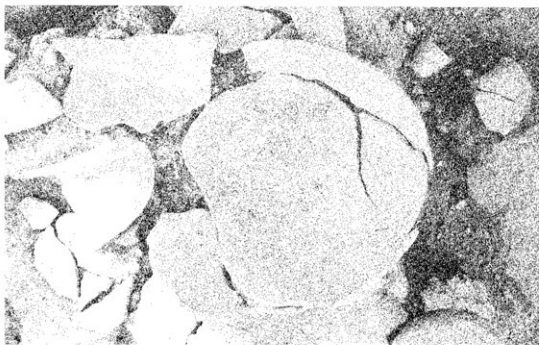
(1) 11号墳石室全景 (発掘中) / (2) 10号墳石室床石取払後



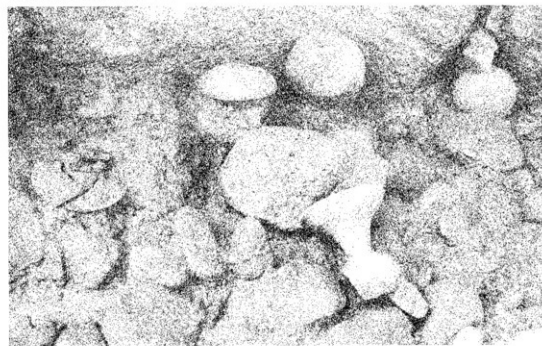
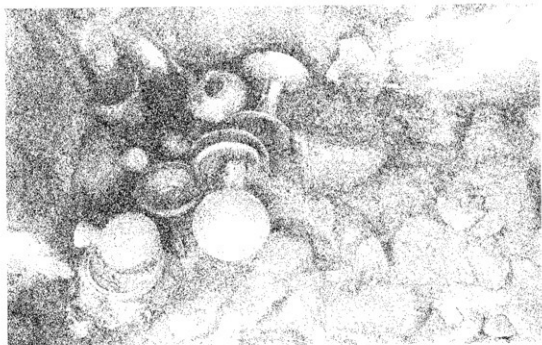
(1) 10号埴土器出土状況 / (2) 10号埴側壁一部



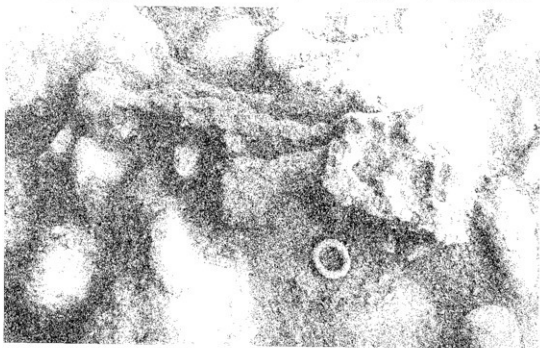
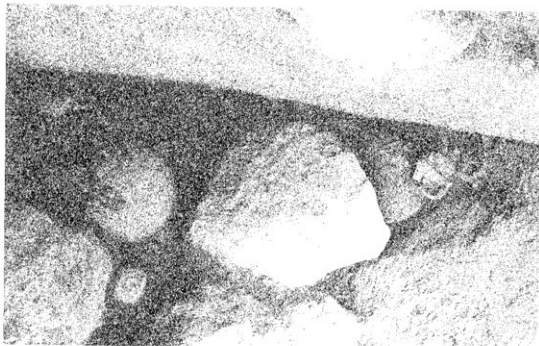
(1) 11号墳石室 (調査中) / (2) 11号墳石室土層



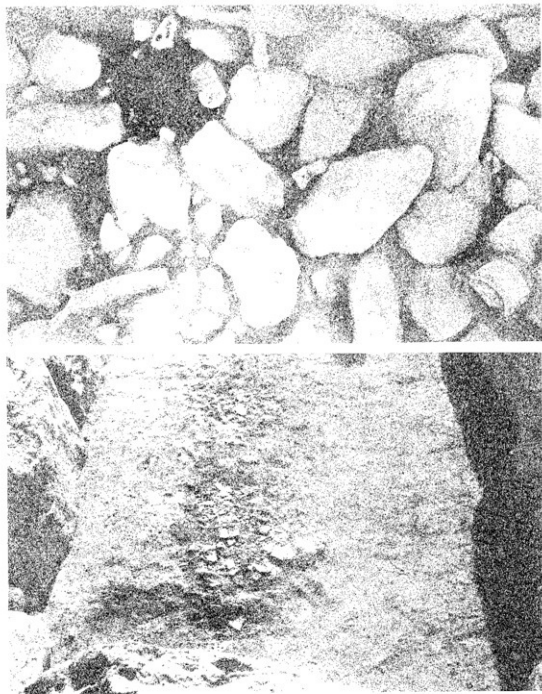
(1) 11号墳遺物出土状況 ①……羨道部 / (2) 11号墳遺物出土状況 ②……羨道部



(1) 11号墳遺物出土状況 ③……左袖部 / (2) 11号墳遺物出土状況 ④……玄室左側壁



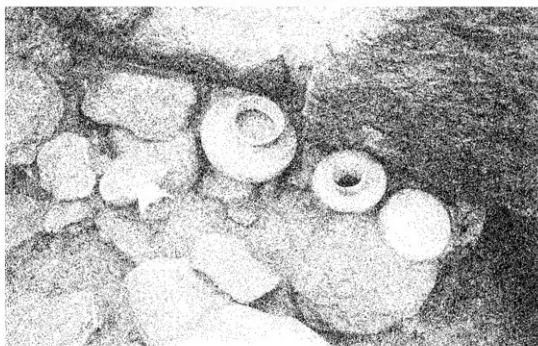
(1) 11号墳遺物出土状況 ⑤……玄室左奥隅 / (2) 11号墳遺物出土状況 ⑥……玄室中央近く



(1) 11号墳遺物出土状況 ㉑……女室右側壁 / (2) 11号墳遺物出土状況 ㉒……床石下



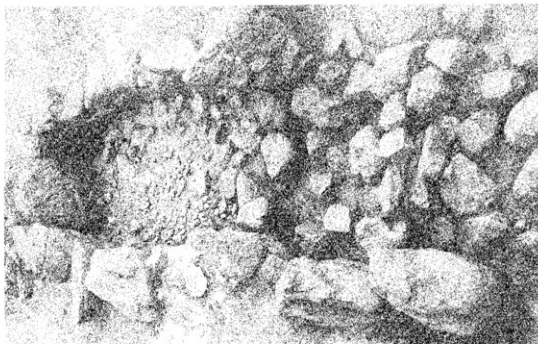
(1) 12号墳石室全景 / (2) 13号墳調査前状況



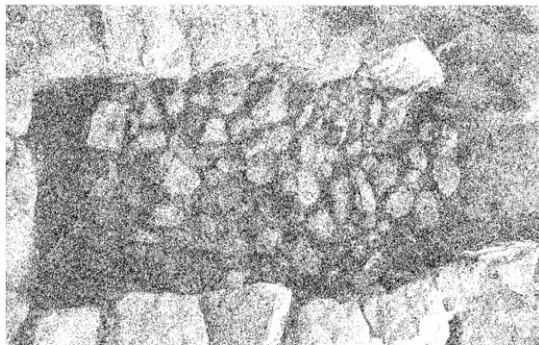
(1) 13号墳遺物出土状況 ①……閉塞石内 / (2) 13号墳遺物出土状況 ②……右袖部



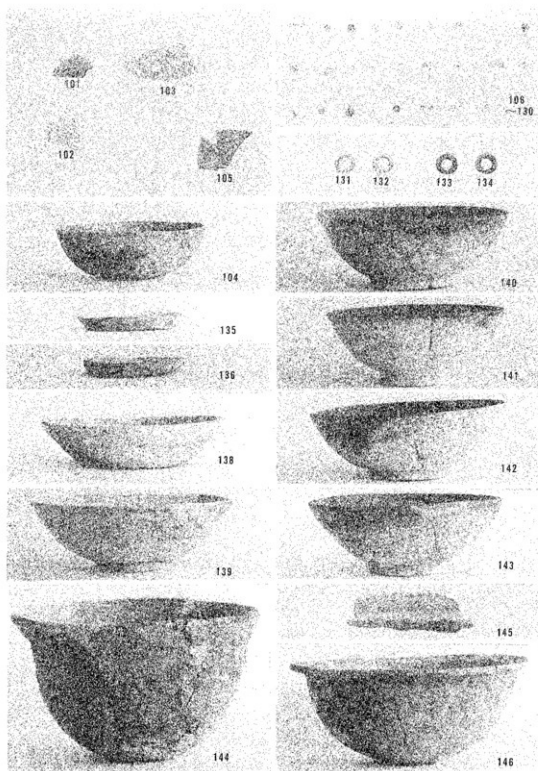
(1) 13号墳遺物出土状況 ③……玄室基底石間 / (2) 13号墳検出周溝及墳丘上の配石



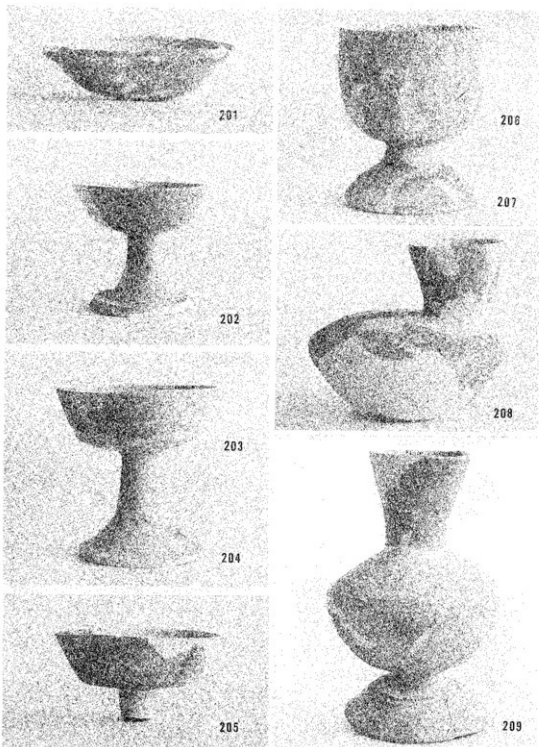
(1) 13号墳石室全景 / (2) 13号墳石室全景(閉塞石除去後)



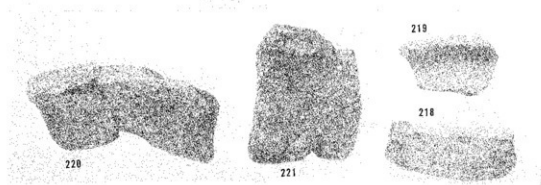
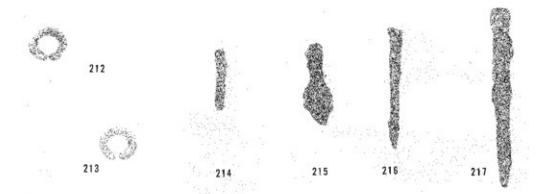
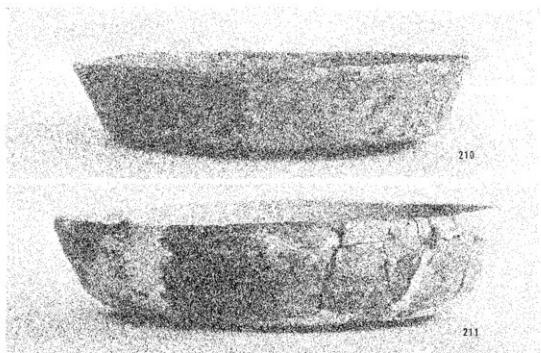
(1) 13号墳石室全景(棺床除去後) / (2) 13号墳石室全景(床石除去後)



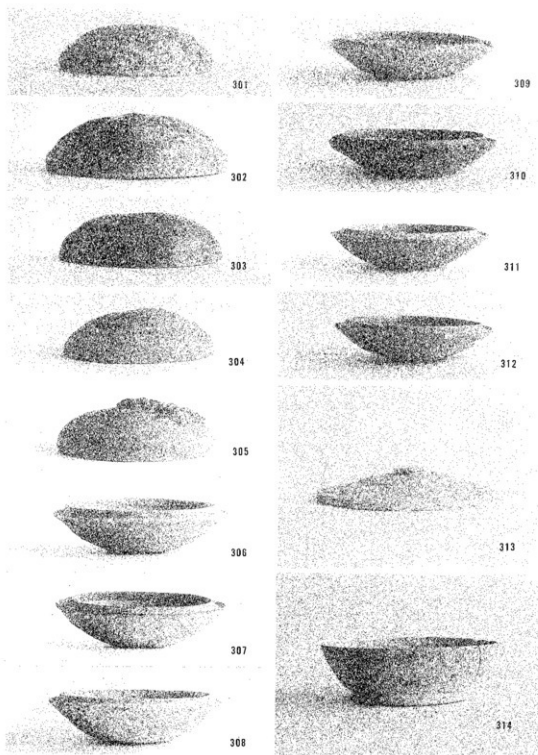
南山浦9号墳出土遺物 (101~146)



南山浦10号墳出土遺物 (201~209)



南山浦10号墳出土遺物 (210~221)



南山浦11号出土文物 (301~314)



316



315



319



318

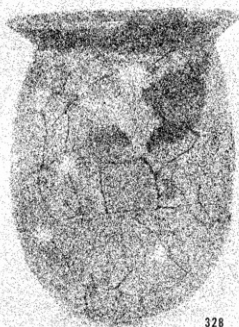


320

南山浦11号墳出土遺物 (315~320、317は除く)



南山浦11号墳出土遺物 (321~327)



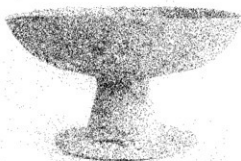
328



329



330

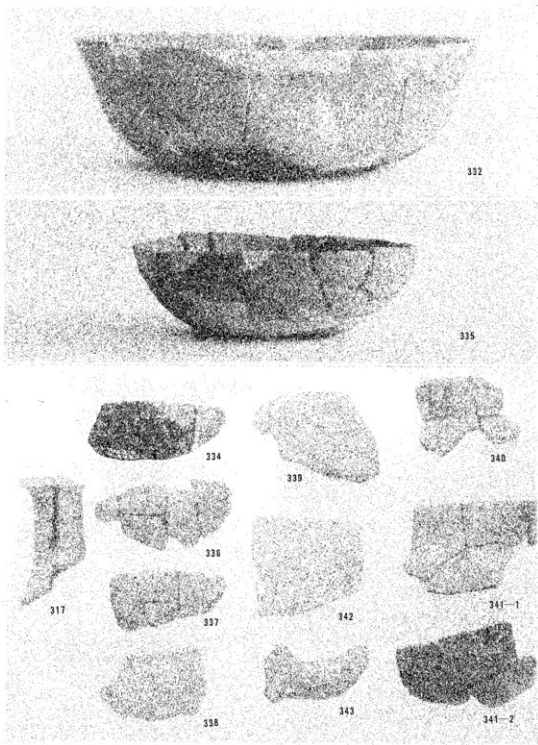


331

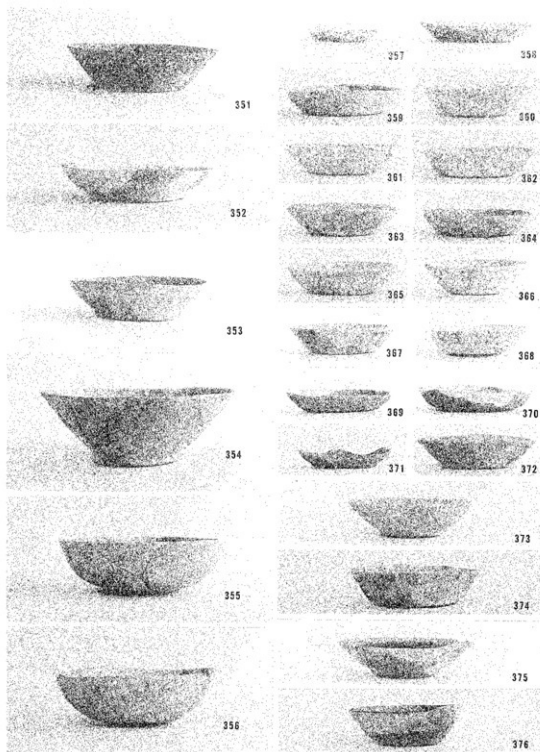


333

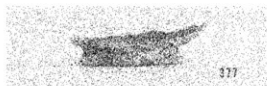
南山浦11号墳出土遺物 (328~333、332は除く)



南山浦11号坑出土遺物 (317・332・334~343)



南山浦11号墳出土遺物 (351~376)



377



378



382



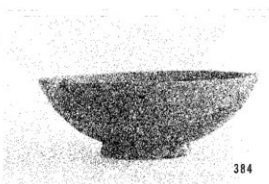
379



383



380



384

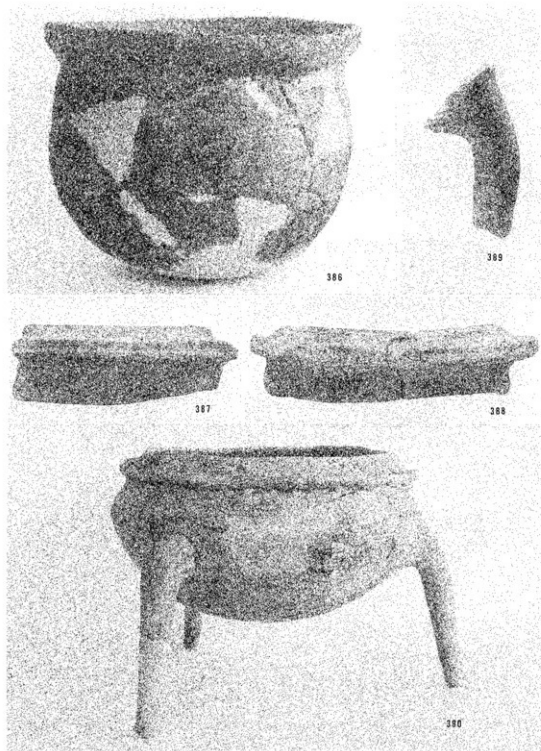


381

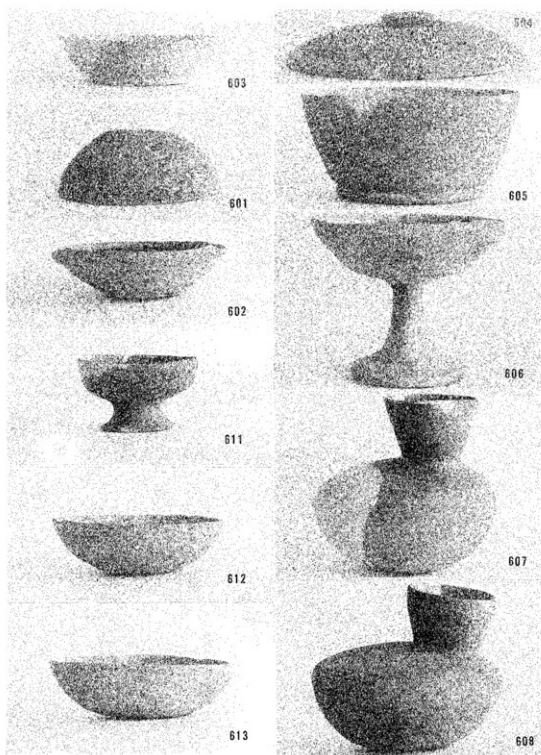


385

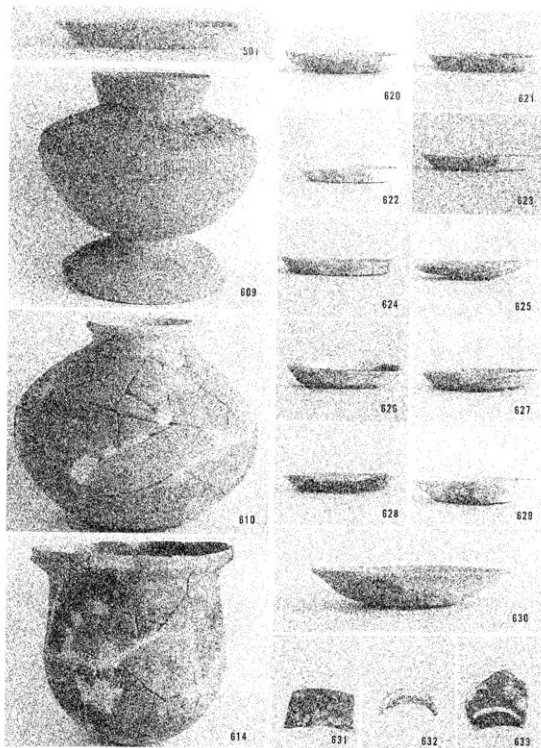
南山浦11号出土遺物 (377~385)



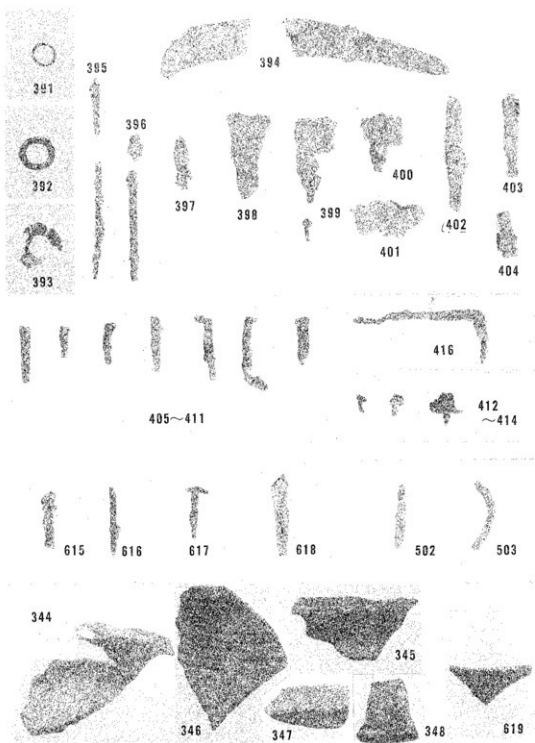
南山浦11号墳出土遺物 (386~390)



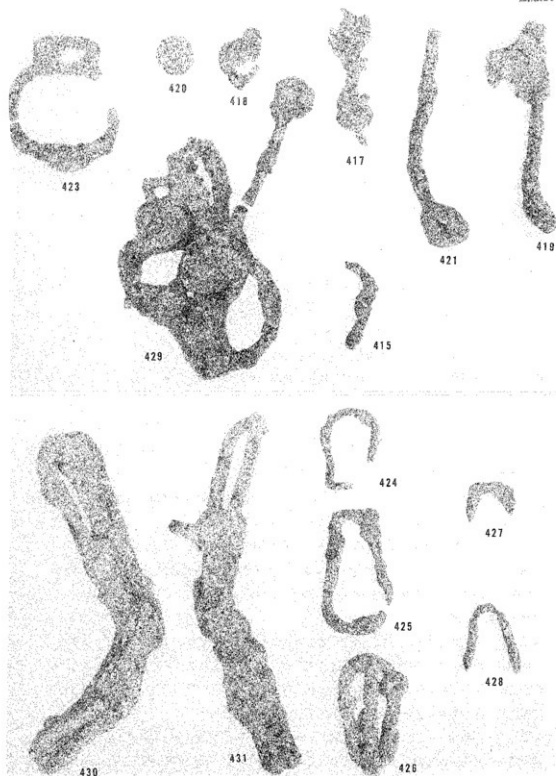
南山浦13号墳出土遺物（601～613，609，610は除く）



南山浦12, 13号坑出土遺物 (501、609、610、614~633)



南山浦11~13号墳出土遺物 (344~348, 391~416, 502-503, 615~619)



南山浦11号墳出土遺物 (415, 417~431)

参 考 文 献

- 香川県文蹟名勝天然記念物調査会「文蹟名勝天然記念物調査報告 第31の第2・『石清尾山(大古墳群)』 1928
- 梅原末治「讃岐高松石清尾山石塚の研究」京都帝国大学文学部考古学研究報告第12冊 1933
- 「石清尾山塊古墳群調査報告」高松市教育委員会 1973
- 渡部明夫・藤井雄三「鶴尾神社4号墳調査報告書」高松市教育委員会 1983
- 中村 浩「和泉陶器窯の研究」柏書房 1981
- 田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981
- 渡部明夫「香川県における須恵器編年(1)」香川史学6 1977
- 松本敏三ほか「青ノ山6号墳調査報告」丸亀市教育委員会 1977
- 円羽佑一「大川郡引田町川北1号墳」『香川考古・創刊号』香川考古刊行会
- 円羽佑一ほか「藤井古墳」白鳥町文化財保護協会 1984
- 渡部明夫ほか「前山古墳群調査報告」長尾町教育委員会 1981
- 松本敏三「久本古墳」『教育香川』 1977
- 大山真充ほか「高松市・山下古墳調査報告書」香川県教育委員会 1980
- 伊沢肇一・真鍋昌宏ほか「青ノ山7号墳」 1980 丸亀市教育委員会
- 森本義臣「青ノ山・宇多津5号墳調査報告書」宇多津町教育委員会 1983
- 秋山忠・松本敏三ほか「黒島林第5・6号墳調査報告」黒島林古墳群発掘調査団 1977
- 松本豊胤・松本敏三ほか「母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳発掘調査概要」観音寺市教育委員会 1973
- 松本豊胤・松本敏三ほか「高松グランドカントリー建設事に伴う埋蔵文化財調査報告書」高松グランドカントリー建設事に伴う埋蔵文化財調査団 1974
- 森本義臣・東原輝明「王墓山古墳調査概報」善通寺市教育委員会 1983
- 広瀬常雄・六車功「真伏古墳」『香川県埋蔵文化財調査年報』香川県教育委員会 1979
- 伊沢肇一・六車功「長尾町陰浦1号墳・陰浦2号墳発掘調査報告」『ふるさと長尾第3号』長尾町教育委員会 1979
- 渡部明夫・大山真充ほか「岡の御堂古墳群調査概報」綾南町教育委員会 1977
- 大塚初重・戸沢充則・佐原真 編集「日本考古学を学ぶ1～3」有斐閣 1979
- 広瀬常雄「日本の古代遺跡8香川」保育社 1983
- 河瀬正利「歎観音免古墳群」広島県海田町教育委員会 1979
- 井上勝之・川畑迪「木の葉塚(サギノクチ号墳)」『文化財協会報』香川県文化財保護協会
- 田辺昭三・西尾幸則ほか「東山・鶯が森古墳群調査報告書」松山市教育委員会 1981

ほか

南山浦古墳群調査報告書

1985年3月31日 発行

編集・発行 高松市教育委員会
高松市番町一丁目8番15号
印刷 街中央印刷所
高松市藤塚町二丁目10-2